

日本オリエント学会だより

- 1) 第53回大会
- 2) 学会奨励賞
- 3) 作文コンクール
- 4) 新入会員
- 5) 会員消息

1) 第53回大会

期 日：2011年（平成23年）11月19日（土）～20日（日）

会 場：ノートルダム清心女子大学

担 当：第53回大会実行委員会

委員長：紺谷亮一，副委員長：谷一 尚

委 員：須藤 寛，小野田伸

第1日 11月19日（土）

14：00～ 公開講演会

17：20～ 奨励賞授与式

18：00～ 懇親会

第2日 11月20日（日）

10：30～ 研究発表

参加者 173名

プログラム

第1日 公開講演会 ノートルダム清心女子大学 中央棟 4階640ND

14：00～ 広島大学大学院文学研究科教授 広瀬清秀

「広島大学のイラン考古学調査と25年目の邂逅」

15：30～ 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 新納 泉

「空間情報科学で描く岡山県の古墳時代」

第2日 研究発表 6部会

ノートルダム清心女子大学 中央棟，ジュリーホール

研究発表者・題目

第1会場

1. 西秋 良宏 中東ネアンデルタール人の居住空間
2. 下釜 和也 南コーカサス地域における中期・後期旧石器時代と旧人・新人の交

替

3. 門脇 誠二 北レヴァント地方における終末期旧石器時代中葉の石器製作伝統
4. 藤井 純夫 ヨルダン南部、ジャフル盆地における新石器時代のダム・システム
5. 小高 敬寛 西アジア新石器時代の鉢形土器にみられる突帯——テル・エル＝ケルク遺跡出土資料からの一考察
6. 須藤 寛史 中央アナトリアのカナーン石刃——キュルテペ遺跡出土資料の検討
7. 山藤 正敏 「都市化」前後の磨研技術——皿・鉢形土器に見る前期青銅器時代パレスティナ地域の社会-経済的特質
8. 有松 唯 イラン北部、青銅器時代における暗色磨研土器「拡散」現象の実態

第2会場

1. 久米 正吾 前・中期青銅器時代ユーフラテス河中流域の都市化と遊牧化
2. 西山 伸一 海を渡った技術？ 北レヴァント鉄器時代の織物産業
3. 土居 通正 紀元前12世紀前半のキプロス島とレヴァント出土のエーゲ海域産動物文付き土器に関する編年的一考察
4. 小野塚拓造 エジプト新王国の南レヴァント進出とその痕跡——考古学調査の進展とエジプト式土器をめぐって
5. 柴田 大輔 古代メソポタミアにおけるニヌルタ神とマルドゥク神のバラグ祭儀歌——神話・祭儀・政治
6. 四角 隆二 サーサン・ガラスをめぐって
7. 北 進一 ライオンの東漸と獅子像の成立
8. 劉晶晶・ヤマンラール水野美奈子 サライ・アルバムの中国的絵画における道教的要素

第3会場

1. 小山 彰 中エジプト語における強調構文と名詞述部文の連関について
2. 菊地 敬夫 アムドゥアト書の機能について
3. 馬場 匡浩 エジプト初期国家形成期の土器製作技術——成形技術を中心に
4. 吉村作治・矢澤健 エジプト・ダハシュール北遺跡の地下遺構に対するインターネットを用いた公開方法の検討
5. 柏木 裕之 第55号墓（ラモーゼ墓）における列柱前室の改変について——エジプト・アメンヘテプ3世期の大型岩窟墓に関する建築的調査
6. 近藤 二郎 テーベ岩窟墓第47号墓の発掘調査について
7. 河合 望 トゥットアンクアメン王の治世における政治体制と高官について

第4会場

1. 関廣尚世・村治笙子 カジュバルダム水没危機遺跡群の踏査成果と今後の課題
2. 田澤 恵子 エジプト西方砂漠ハルガ・オアシス アル・ザヤーン神殿遺跡の調査——神殿装飾からのアプローチ
3. 深谷 雅嗣 祭礼における高級神官の任命——アメンの神妻（Hm.t-nTr）の場合
4. 藤井 信之 プトレマイオス朝初期の（大）將軍たち——その性格をめぐる一考察
5. 小茄子川歩 インダス式印章の「発明」
6. 土谷 遥子 ダレル・マジェネイ支脈渓谷現地調査（2010）——『法顕伝』陀歴仏教寺院とブグッチ遺跡に関連して
7. 岡村 知明 インド・カティアワール地方における中世の都市構造に関する考察——マンガロールを中心に
8. 蓼沼理絵子 中世セファルディームの種なしパン——ハガダーや教訓書に見る伝承とイメージ

第5会場

1. 横内 吾郎 ウマイヤ朝後期の婚姻政策
2. 橋爪 烈 「正統カリフ」概念の確立とその意義について
3. 柳谷あゆみ ザンギー朝ヌール・アッディーンへのヒドゥマ——軍役・移動の記録を中心に
4. 四日市康博 イル＝ハン朝期アルダビール文書にみる東西ユーラシア交流
5. 太田(塚田)絵里奈 後期マムルーク朝書記官僚の肖像——ザイン・アッディーン・イブン・ムズヒルを例に
6. 山口 昭彦 サファヴィー朝の多民族統合と移住政策——クルド系諸部族の東部移住をめぐる
7. 松尾有里子 近代オスマン帝国における女子教育制度の導入
8. 宮武 志郎 オスマン朝末期のユダヤ教徒——万国イスラエル連合を中心に

第6会場

1. 近藤 洋平 東方イバード派におけるハワーリジュ派叙述の展開
2. 倉澤 理 初期アシュアリー派神学著作における原子論の位置づけに関する再考の試み——ジュワイニー（イマームル・ハラマイン）の神学著作を中心に
3. 矢口 直英 イブン・シーナー『動物論』におけるヒト
4. 中西 悠喜 『親密の灯』冒頭部に見るファナーリーの学問論——「実相学」の

主題設定と主題論・原理論の改変

5. 波戸 愛美 ジャーヒズの『書簡集』にみられる奴隷について
6. 浜本 一典 トゥーフィーのマスラハ理論とその評価
7. 高橋 圭 20世紀前半のエジプト社会とスーフィズム——タリーカ系諸団体の活動から
8. 丸山 大介 現代スーダンに見るタサウフとサラフの関係——ルカイニー教団を事例として

ポスターセッション

1. 小高 敬寛 北レヴェント土器新石器時代編年の精細化に向けて——テル・エル＝ケルク遺跡東トレンチの出土土器から
2. 関廣尚世・村治笙子 スーダン共和国における彩色壁画について
3. 吉村作治・黒河内宏昌・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・山田綾乃
エジプト・ギザ、クフ王第2の船の船坑の蓋石調査
4. 月本昭男・長谷川修一・小野塚拓造 テル・レヘシュ遺跡第6次発掘調査報告
5. 銭廣 健人 スーダン図書館所蔵のマカダム・コレクションについて
6. 長谷川敦章 紀元前2千年紀後葉のキプロス土器の独自性と流通——古代オリエント博物館所蔵資料の分析を中心に
7. 紺谷亮一・須藤寛史・早川裕式・山口雄治・フィクリ・クラックオウル・クトゥル・エムレ トルコ共和国カイセリ県一般調査 (KAYAP)
8. 永井 正勝 古代エジプトの神官文字に対する「画像を利用したデータベース」の概要
9. 菊地敬夫・犬井正男・佐藤真知子・吉村作治
アメンヘテプ3世王墓の埋葬室に描かれた壁画の史料化に向けたデジタル画像化——その2
10. 門脇誠二・久米正吾・下釜和也・西秋良宏
ユーフラテス川中流域の先史遺跡——第五次踏査報告
11. 河合 望 王家の谷・西谷、アメンヘテプ3世王墓出土の副葬品について

第1会場

1. 中東ネアンデルタール人の居住空間 西秋 良宏

現代人の居住空間は機能的に分割されていることがふつうである。それは、ヒトが進化の過程において確立してきた行動様式の一つらしい。居住空間の機能的分割が達成されるには、空間の認知的構造化が必要であったとされる。類人猿の行動にそのような形

跡が見当たらないこと、前・中期旧石器時代の遺跡にあっても証拠が乏しいこと、さらには後期旧石器時代になると証拠が急増することなどをもって、それは新人（ホモ・サピエンス）に固有な現代人的行動の一つと考えられてきた。ところが、新人以前の遺跡においても空間分割が認められることが近年、いくつか指摘され、論議を呼ぶにいたっている。

本発表では、ヒトの居住空間の機能的分割にかかわる証拠について言及する。取り上げるのは約75万年前のゲスル・ベノート・ヤコブ、30万年前のケーシム、5-6万年前のアムッド、ケバラ（イスラエル）、トール・ファラジ（ヨルダン）など中近東を中心とした前・中期旧石器時代諸遺跡である。このうち、ゲスル・ベノート・ヤコブ、トール・ファラジにおいては空間分割の証拠が認められる。ついで、シリア砂漠に位置する約20万年前の中期旧石器時代遺跡、ドゥアラ洞窟で得られた知見を紹介する。データは1984年に東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団が実施した発掘調査で得られたものである。ドゥアラ洞窟の生活面から出土した石器や動・植物化石の分布や内容を分析した結果、この遺跡においても空間の機能的分割が認められることが判明した。

以上をふまえると、空間分析にかかわる証拠が確実に得られているのは湿地（ゲスル・ベノート・ヤコブ）と沙漠（トール・ファラジ、ドゥアラ）に限られていることに注意がいく。すなわち、居住面が良好に保存されている遺跡群である。従来、旧人段階の遺跡で明瞭な空間分割が認めがたかったのは地溝帯の遺跡群、すなわち繰り返し利用されたため居住痕跡の重ね書きが顕著な洞窟（アムッド、ケバラなど）が発掘の中心であったことに由来するのではなからうか。将来、重ね書きに十分配慮した高解像度空間分析が発展していけば、旧人段階においても空間分割の証拠が急増するものと予想する。証拠が増した段階で旧人、新人間の空間構造の内容を比較するのがよい。現段階で得られている空間分割の証拠をもって新人の認知能力の特質を議論することは時期尚早である。

2. 南コーカサス地域における中期・後期旧石器時代と旧人・新人の交替

下釜 和也

コーカサス地域は、地理的にみて、南の西アジア地域と北のロシア・ヨーロッパ平原地域を結ぶ回廊地帯のごとき立地を呈している。約20万年前にアフリカ大陸に起源したホモ・サピエンス（新人）が世界各地に拡散居住していく過程で、この地域が主としてユーラシア大陸西部への拡散ルートとして重要な役割を担っていたことが、近年遺伝学的な諸研究により注目されている。その過程において、当地域に先住していたネアンデルタール人（旧人）は新人の到来によってどのような運命をたどったのだろうか、またその交替時期はいつ頃だったのか。

本発表では、主に南コーカサス地域を中心としてこれまでに確認されている考古資料データ群を集成し再評価するのが目的となる。これまでに蓄積された文献データの分析や理化学年代値の検討などといった基礎的な作業を通じて、旧人と新人の交替期における石器製作伝統の消長パターン、それらの時空間分布を特定する。特に他地域で議論の対象となっている現代人特有の行動様式あるいは象徴行動の痕跡が、コーカサス地域において、いつ、どの段階で、どのように出現するのか、また、古気候変動との関連性や、想定される仮説について考古学的証拠を基に検証を行う。

その結果、中期旧石器時代終末期から後期旧石器時代初期にかけて石器群の技術的特徴に、移行期的な連続性よりもむしろ明瞭な断絶がみられることが明らかになってきた。また軌を同じくして、それまで見られなかった骨角器インダストリーが出現することも特筆に値する。一部の遺跡における高精度の放射性炭素年代測定によって、交替が起こった時期もおおよそ 38-34 ka BP の期間に集中するという見通しがたってきた。

当地域では後期旧石器時代に伴う出土人骨がほぼ皆無にちかいことから解剖学な意味での新人の同定が立ち後れている上、従来の発掘資料の性質に基づく制約、理化学的年代値データが不十分であるなど残された研究課題は多い。今後コーカサス地域における旧人・新人の交替の真相についてさらに詳しく検証していくための基礎的資料を提供するとともに、レヴァント、アナトリア、ザグロス地域など中東各地やヨーロッパ等の周辺諸地域における両者の交替と、どのような類似または差異が考え得るか、そうした比較研究を可能にする第一歩としたい。

3. 北レヴァント地方における終末期旧石器時代中葉の石器製作伝統 門脇 誠二

ユーフラテス川中流域において発表者らが行っている先史遺跡調査（代表：西秋良宏教授、東京大学）によって得られた終末期旧石器時代の石器資料を報告し、その技術形態的特徴が示す石器製作伝統について発表者の解釈を示した。石器資料が得られた場所は、北シリアのラッカ市東方約40kmで、ユーフラテス川南岸の河岸段丘上のステップ地帯である。この台地北端を開析するワディ沿いにおいて中期～終末期旧石器時代の石器が散布する地点をこれまでに100以上発見した。その中でも特に後期～終末期旧石器時代の遺物分布密度が高い10地点において、集約的表採や試掘を行った。

特に終末期旧石器時代中葉の示準的石器が回収された2地点（16Kと16AT'）について報告する。両地点の立地は、ユーフラテス支流のワディの中でも突出して規模の大きいワディ・ハラルの右岸である。両者のあいだの距離は600mほどである。

16AT'地点には地表の石器集中部が3箇所確認され、その内の2地点（16AT'-1と2）において終末期旧石器時代の資料に後期旧石器時代の石器が多少混じりながら分布して

いた（合計839点）。この内、被二次加工石器が54点、石刃・細石刃186点、石核3点である（合計243点）。被二次加工石器の半数以上が細石器で、台形・長方形（trapeze rectangle）の幾何学形細石器が特徴である。また、マイクロビュランは採集されていない。これらの技術形態の特徴が示す幾何学ケバランの石器伝統は、シリア内陸部の遺跡からこれまでも報告されている。

一方、16K地点からは合計268点の石器が回収された。この内、被二次加工石器37点、石刃・細石刃58点、石核2点、マイクロビュラン9点である（合計106点）。被二次加工石器の内29点は細石器であり、その主体は不等辺細石刃（scalene bladelet）や弧状背付き細石刃（arched backed bladelet）といった非幾何学形である。これらの細石器の一部にはマイクロビュランの剥離痕が残ることに加え、マイクロビュラン自体とラ・ムイラー尖頭器が回収されているため、マイクロビュラン技法による細石器製作が行われていたと考えられる。この技術形態の特徴は、現在、南レヴァントのみで報告されているムシャビアン伝統に類似し、その編年に倣えば、幾何学ケバランとおよそ同時期に存在したと考えられる。新たな知見として、この伝統がより北方まで存在した可能性が指摘されるが、この提案の妥当性と意義について今後の議論が必要である。

4. ヨルダン南部、ジャフル盆地における新石器時代のダム・システム

藤井 純夫

西アジアにおけるヒツジ遊牧の起源を探るため、1997年から、ヨルダン南部のジャフル盆地で遺跡調査を続けている。近年では、先土器新石器文化B中・後期（紀元前8100-6750年頃）の移牧拠点とそれに伴う水利施設の問題に取り組んでおり、2件の出先集落（おそらく春营地）と、それに伴う4組（計7基）のダム群を発掘した。今回は後者の側に焦点を当てて、その特徴について検討する。調査の結果、以下のことが判明した。

- 1) 先土器新石器文化B中・後期に始まった移牧には、石造の大型ダムが伴っていた。
- 2) ダムの年代は、隣接出先集落との層位的相関、および出土遺物（特にダム壁に組み込まれた大型抉入石錘）によって確認できる。
- 3) ダムは、水量の多い大型水系よりもむしろ、コントロールの容易な中小規模の水系に集中している。
- 4) ダムは、透水性の高いシルト質土壤に立地し、広くて浅い冠水域を形成するように設計されている。従って、貯水目的ではなく、貯留式灌漑農耕（basin irrigation）用であったと考えられる。同一集落内に貯水槽（cistern）が併存していることも、上記の機能推定を支持している。
- 5) 貯留式灌漑農耕用ダムの平均的な最大冠水面積は、2-3haである。隣接の出先集

落から出土する小麦・大麦などの作物は、この冠水域内で栽培されたものと考えられる。

- 6) 乾燥地灌漑農業の宿命とも言える塩害を回避するため、ダムは半開放的なカア群の最下端部、つまり排水の便の良い場所に構築されている。
- 7) それでも塩害が生じた場合は、下流にやや小型のダムを追加した。これによって形成されたのが見かけ上の「ダム・システム」であるが、実際にはダム更新の結果と考えられる。

重要なのは、6)と7)である。半開放水系最下端部への立地と、下流方向へのダム更新という二律背反は、遠からず破綻する。その結果、一つの半開放的水系を消耗し尽くしてしまい、別の水系への移転が必要となる。ダムの運営母体である出先集落も、これに連動して移転を余儀なくされたと考えられる。その意味で、先土器新石器文化Bの移牧には、気候変動とは関係なく、当初から遊牧への契機が潜在していたことになるであろう。

5. 西アジア新石器時代の鉢形土器にみられる突帯——テル・エル＝ケルク遺跡出土資料からの一考察——

小高 敬寛

トルコ南東部やシリア北部の新石器時代の鉢形土器には、口縁下部あるいは体部上半の外面に横方向の突帯をめぐらす例が顕著にみられる。かつてルミエールらは、この突帯とやはり同時期に頻出する把手を“moyen de préhension”と表現し、手で掴み持つための部位と考えた。報告者も拙論にて若干ふれたことがあるが、新たにテル・エル＝ケルク遺跡の出土資料を用いて、突帯の変遷と意味の検討を試みた。

土器新石器時代最古の時期であるルージュ2a期に、突帯をもつ土器はみられない。また、突帯と同じ機能を想定可能な把手も皆無である。なお、この時期の土器はケルク土器をはじめとした小型の鉢形土器に限られる。

突帯が登場するのは次のルージュ2b期である。この時期の土器は、ケルク土器、暗色磨研土器、粗製土器に分類でき、頸部をもった壺形土器の出現や押捺系の装飾の盛行など、あらゆる側面での多様化が始まる。突帯はケルク土器以外の二種にみられるが、圧倒的に粗製土器の方に多く、2b期後葉に付加される頻度がピークを迎える。突帯には手で掴むのに十分な高さがあり、比較的重い粗製土器には大型の器形が多いと推測されるため、持ち運びを容易にする実用的な部位であったと考えられる。また、把手もこの時期に登場し、2b期前葉にいきなりピークを迎えるが、突帯と同じく粗製土器に著しい。

粗製土器の突帯は、続くルージュ2c期になると急減し、2c期中葉からは稀になる。

これは把手も同様である。一方、暗色磨研土器の突帯は2c期前葉に付加される頻度がピークを迎え、その後は漸減しながらも2c期を通じて一定量は維持される。結果として、突帯は2c期中葉から粗製土器よりも暗色磨研土器の方に多い。但し、この時期の暗色磨研土器の突帯は高さがなく、土器そのものも器壁が薄く軽い。したがって、掴み持つための実用性も、その必要性もなく、痕跡器官化したと評価できる。また、暗色磨研土器の把手も減少する。

報告者は他の拙論で示しているように、当該地域における最古の土器は可搬性が重要視されたと考えている。突帯は、土器の多様化が始まるなかで、大型化した土器に対し可搬性を確保するために盛行したと解釈できる。その後に急減するのは、器種分化がより進んだ結果、持ち運びしやすい小型で薄手の土器と移動を前提としない大型の土器との作り分けが明確になり、その必要性が減退したためではなかろうか。

6. 中央アナトリアのカナン石刃——キュルテベ遺跡出土資料の検討——

須藤 寛史

筆者は2008年からトルコ、カイセリ県における遺跡踏査（KAYAP）に参加している。KAYAP採集資料との比較のためキュルテベ出土資料を観察したところ、1点のカナン石刃を認めた。そこで過去の出土資料と合わせ、19点のカナン石刃について調査の機会を得た。

カナン石刃とは後期銅石器時代（LC）から前期青銅器時代（EBA）に、南レヴァントや南東アナトリアを中心に北シリア、北イラクなどに広く分布する石器である。併行する稜が2本走り、断面は台形を呈する。多くは短く折られているが、完全なものは長さ15cm以上のものもある。幅は3cm前後、厚さは1cm以下のものが多い。規格的な形状と際立って大きいことが特徴である。側縁は光沢を帯び、鎌、あるいは脱穀種の刃であると考えられている。製作址の発見は少なく、いくつかの生産センターから各地へ流通したと考えられている。

キュルテベ遺跡のカナン石刃19点のうち、13点はEBAのものであった。幅は平均3.2cm、長さは平均8.3cm（5.2-12.5cm）、厚さは0.6-1.1cmである。石材は灰色、乳白色、暗褐色とその他の4種に分けられた。側縁部には細かな調整剥離があり鎌刃光沢が認められる。折断部に急角度の調整剥離が施されている。

中央アナトリアではカナン石刃はあまり知られていない。キュルテベ周辺ではアリシャルホユックに簡単な報告があり、KAYAPで踏査したイキテペにおいて1点採集したが、カイセリ以西においては報告例を認められなかった。現時点ではカイセリが分布の西限である。キュルテベから最も近い生産遺跡はアルスランテペだが約240kmの距

離がある。この間の地域の情報を精査する必要がある。なお発表後、本報告例とよく似た石材がユーフラテス流域で使われているとのコメントをいただいた。この点もふまえてカナーン石刃の分布状況を整理していきたい。

キュルテペ遺跡の資料中、側縁が激しく摩耗した例が2点あった。鎌や脱穀櫛では考えにくい使用痕である。またキュルテペでは床下に埋められた壺からの出土例があった。分布の中心地域と異なる用途、意味があったのだろうか。キュルテペでは現在EBA層を掘り下げている。南東アナトリアではLCに出現し、EBAに南レヴェントに広まったと考えられている。キュルテペ遺跡のカナーン石刃がどこまで遡るかも今後の検討事項である。

7. 「都市化」前後の磨研技術——皿・鉢形土器に見る前期青銅器時代パレスティナ地域の社会 - 経済的特質——

山藤 正敏

本研究発表は、前4千年紀末から前3千年紀初のパレスティナ地域における皿・鉢形磨研土器を対象として、1)「都市化」前後の磨研技術の変化を探り、当該期に生じた変動の社会 - 経済的意義を明らかにし、また2)パレスティナ地域における「都市化」の一元的理解を改め、社会 - 文化システムの変動を実証的に理解することを目的とした。

皿・鉢形土器の磨研技術（方向・幅・様式）の分析では、「都市化」直前のEB IB期（前3300～3100/3000年）と「都市化」以後のEB II期（前3100/3000～2700年）の資料を対象とし、時期別・地域別の特徴を明らかにした。まず、EB IB期では、皿形土器がほとんど存在せず、全体として緻密で光沢を放つ水平方向磨研（同心円状磨研）が卓越するが、北部地域ではこの種の磨研が異なる製作様式の土器（Ware）に共通して施され、中・南部地域ではこの他に交差磨研（テル・ダリット）及びランダム磨研（テル・アラド）が認められた。以上から、当該期には地域的に細分化された小規模な生産・流通が推測された。

EB II期に入ると状況が大きく変わった。北部地域では、皿形土器の急増と均質な垂直方向磨研（放射状磨研）の卓越・普及が認められた。これに対して、中・南部地域では、EB IB期と同様に水平方向磨研（同心円状磨研）、交差磨研（中部）、及びランダム磨研（南部）が主に認められ、加えて、北部地域からの影響下に垂直方向磨研（放射状磨研）が少数認められた。これらの結果から、EB II期北部地域での皿・鉢形磨研土器生産・流通の画一化と社会 - 経済圏の確立が推察された。これは、当該期にヘルモン山南麓にて集中生産された硬質土器（Metallic Ware）が北部地域一帯に流通し、本分析対象の多くを占めていたことから裏付けられる。一方、中・南部地域では、それぞれの磨研技術（様式）に基づく生産・流通圏が入れ子状に存在していたことが窺えた。

上記を踏まえて社会-経済的観点から考察すると、1)「都市化」は実際には多元的であったこと、2)「都市化」を特徴づける階層制ではなく、ヘテラルキー概念により各地域間の関係性を捉えるのがより適切であること、を結論として示した。

8. イラン北部、青銅器時代における暗色磨研土器「拡散」現象の実態

有松 唯

青銅器時代（紀元前4千年紀初頭から2千年紀初頭）、イラン北部の物質文化を表象するのは暗褐色の磨研土器（以下、暗色磨研土器）である。この土器群の特徴は、以前の時期には無い形態的・技術的特異性ととも、その斉一的な広域分布にある。1960年代から分布の背景をめぐる議論は盛んで、分布範囲を異民族の侵入範囲と捉えるむきは近年では鎮静したもの、では一方で暗色磨研土器の「拡散」現象の背景について代わる説が在るかといえ、説得力を持つものは無い。

暗色磨研土器は概算で2000年間の存続期間が認められており、形態的变化に沿っての時期区分も成されている。しかし時期区分に沿って「拡散」の通時的变化を検証する試みは無かった。また、暗色磨研土器の分布域は直線距離で500km以上、そのなかには中東最高峰を有する標高差があり、地勢や自然環境も多様だ。しかし先行研究では、そうした対象地域の様相をごく少数の遺跡間の比較で把握するにとどまってきた。

そこで本研究では広島大学イラン学術調査隊が1970年代に実施した調査の未発表成果を用いることで、従来検証が不足していた地域も含めて分布範囲の変化とよりミクロな範囲での分布傾向の変化を併せて検証し、暗色磨研土器「拡散」現象の通時的变化を明らかにした。

その結果、暗色磨研土器は初期段階からイラン北部の広範に広がっていたことが明らかになった。しかしその直後の時期には分布範囲は縮小し、遺跡数も格段に減少する。初期段階の「拡散」は、散発的な現象だったようだ。それがその後、分布域の再びの拡大と分布遺跡数の増加が起こる。それまでには暗色磨研土器が無かった遺跡でもこの土器が確認できて、分布遺跡数は最多となる。この時期には突出した個人墓が出現するという指摘もあり、この土器を有する社会の安定と発達に「拡散」の背景にあったと考えられる。しかし末期には分布域の縮小とともに、一定数の分布があった地域でも遺跡数が格段に減少し、終息する。

このように暗色磨研土器の「拡散」傾向は時期ごと・地域ごとに異なるし、同時に、分布域が示すものはそれぞれで本質的に異なる可能性が指摘できる。今後はこの本質的差異を考慮しながら、むしろそこに着目しながら、現象の背景を検討していく必要があると思われる。

第2会場

1. 前・中期青銅器時代ユーフラテス河中流域の都市化と遊牧化 久米 正吾

本稿ではシリア領ユーフラテス河中流域における前・中期青銅器時代移行時の居住及び生業形態について議論する。これまでの現地調査の成果及び先行研究の再検討により、同流域における前・中期の移行では、地域的レベルでの居住遺跡の放棄、大規模居住遺跡への人口集中、ビシュリ台地縁辺部への小規模居住遺跡の転移、ケルン墓への墓制変化等が確認された。これらは前・中期の移行に都市化・遊牧化現象が同時進行的に関わっていた可能性を示唆する。

前・中期移行時には、所謂4.2Kイベントと呼ばれる気候悪化を一因とする大規模な社会変容が北メソポタミア一帯で起こったと言われる。それでは、中流域における都市化・遊牧化現象は、同流域に特有のものか、それとも北メソポタミア一帯に認められるのか。中流域に特有であるとすれば、その背景にある特色とは何か。この疑問を解決するために、中流域と他地域の移行時における居住傾向を比較した。対象として選択された地域は、地理条件の異なるシリア領内の3地域である。すなわち、天水農耕が可能な年降水量200mm以上のハブール流域（天水域）、中流域と同じく天水農耕が不可能ではないが安定してそれを営めない200mm前後のアサド湖北域（境界域）、天水農耕が不可能で河川灌漑による農耕を行っていた200mm以下のユーフラテス河下流域（灌漑域）である。

比較の結果、境界域では中期に移行した段階で遺跡数が激減する一方、天水域や灌漑域では遺跡数が大幅に増加することがわかった。さらに境界域では、前・中期移行時における遺跡の継続性が著しく低いことが判明した。これらの結果は1) 安定的農耕が実施可能な天水域及び灌漑域では4.2Kイベント時における環境悪化から回復した中期において速やかに以前の居住及び生業形態に復帰することが可能であったこと、2) 一方、農耕を安定的に実施することができない境界域では、気候回復後の中期においても前期の集落遺跡に再居住することなく遊牧の適応を継続して行っていたこと、を示唆する。

以上示した中期における境界域と天水・灌漑域の対照的居住傾向は、中流域居住者が定住集落を維持していた前期においても、定住に過度に依存しない遊牧的生業活動とメンタリティを有していたことを暗示する。また、中期の中流域において遊牧化を維持できた背景には、様々な資源交換が可能な市場としての都市の発達があったと見られる。

2. 海を渡った技術？ 北レヴァント鉄器時代の織物産業 西山 伸一

北レヴァント鉄器時代の出土遺物の中に、一見奇妙な円筒形の土製遺物が存在する。この遺物は、糸巻き形錘（spool/reel/bobbin weights）と呼ばれ、近年の研究や発掘成

果から経糸おもり織機（warp-weighted loom）に使われた錘と考えられている。焼成されたり未焼成の状態で発掘されるこの錘は、レヴァント地方の青銅器・鉄器時代によく見られる円錐形や円形の錘と異なり、経糸を通す穿孔が見られない。

近年の研究者たちは、この錘が後期青銅器時代末期にアナトリアやエーゲ海方面から移動してきた人々によってもたらされたと考えている。この糸巻き形錘は、これまで主に南レヴァント沿岸部から報告されてきたが、近年、北レヴァント地方からも多く発見されている。チェッキーニ（S.M. Cecchini）によるテル・アフィス（Tell Afis）出土資料の研究は、北レヴァント地方にも糸巻き形錘を使用した経糸おもり織機が存在したことを明らかにした。しかし、北レヴァント地方の鉄器時代の織物産業の実態には、まだ多くの不明点が残されている。

本発表では、アフィス近郊のテル・マストゥーマ（Tell Mastuma）出土の織物関連遺物（錘、紡錘車、骨ヘラなど）の中に見られる糸巻き形錘に着目した。鉄器時代Ⅱ期の層から出土した錘には、大甕の口縁部を再利用したものが多くあることはすでに発表したが（Nishiyama 1998）、本発表では、それ以外の糸巻き形錘、さらに紡錘車、骨ヘラも含めた分析を行った。マストゥーマ出土の錘については、その種類、出土コンテキスト、重量、出土頻度、遺跡内の空間分布の成果を提示した。

その結果、マストゥーマの織物作業は、鉄器時代村落の根幹産業である麦類と果樹（主にブドウ、オリーブ）の栽培と深く関連していた可能性が高い。マストゥーマの織物産業は、織機が実際に何を作り出していたのかは残念ながら残されていないが、錘の重量から推測する限り、少なくとも数種類の布が生産されていたと考えられる。中でも糸巻き形錘は、最も重いことからしっかりした「布」を織っていた可能性が高い。また、糸巻き形錘は大甕の再利用品でも大量に作られていたことは、この錘を利用した織機で織られた「布」が多く必要であったと推測できる。すなわち、織機は一般の衣類用の布だけでなく、農産物に関連した果樹の収穫や搾汁のための袋や布類が生産されていた可能性が指摘できる。

3. 紀元前12世紀前半のキプロス島とレヴァント出土のエーゲ海域産動物文付き土器に関する編年的一考察 土居 通正

紀元前12世紀前半の東地中海世界は「海の民」の活動に代表される不安定な状況にあり、物資の集散地として栄えたシリアのウガリトも、最近の説では前1190年から1185年の間に最終的に破壊されている。ウガリトからはエーゲ海域で製作された土器が特に多く出土しており、実年代を持つ遺物がそれらに年代を与え、ギリシア本土とエーゲ海の編年研究に重要な資料を提供している。中でも、ウガリト終末期の層から出土したこれ

らの土器のエーゲ海土器編年に於ける位置付けは、ウガリト崩壊時のギリシア本土の情勢如何という問題に関わり、当時の東地中海世界とエーゲ海世界との関係を考える上で極めて重要である。

ギリシア本土では近年ミケーネとティリュンスに於ける発掘に基づきこの時期の細分が進められたが、本発表ではウガリト終末期に搬入されたエーゲ海域産の土器の中、特に「馬の主人」と名付けられた有名なアンフォラ型クラテルに描かれている動物文（馬、山羊、海豚）と人物像の細部を検討した。Hankey と Mountjoy は、このクラテルの年代を Late Helladic (LH) III C Early 期としており、確かに描かれた馬の胴体の表現その他に通常の LH III B 期に無い特徴が見られる。しかしこれには LH III B 期の図像と直接比較出来る表現も見られ、更に、最近公刊されたティリュンス出土のクラテルはこのクラテル同様、様式上若干進んだ馬の図柄を持つが、層位的に宮殿最終崩壊前に位置付けられている。LH III C 期の開始は一般にティリュンス宮殿最終崩壊後とされるので、「馬の主人」のクラテルは LH III B 期末、新しい用語法に従えば LH III B2 Late 期に比定出来、LH III C 期開始の年代については、これを通説より10年引き下げ、前1180年頃とする E. French の説が妥当であろう。

このクラテルは胎土の化学分析からアナトリア南西部、カリア地方製とされる一群のアンフォラ型クラテルの一つであるが、これらの器形的特徴にクレタ島の影響が認められる。このクラテルに近接して非常に大形のクレタ島製蛸文付きアンフォラ型クラテルが出土しているが、キプロスにも同類のクレタ島製動物文付き土器が見られる。これらは同じくウガリト終末期に搬入されたと考えられ、この頃のクレタ島の活発な活動を示唆し、所謂カリア地方製のアンフォラ型クラテルと共に、分極化する当時の情勢を反映したものと考えられる。

4. エジプト新王国の南レヴァント進出とその痕跡——考古学調査の進展とエジプト式土器をめぐって——

小野塚拓造

後期青銅器時代の南レヴァントはエジプト新王国の支配下に組み込まれ、その影響を多大に受けたとされる。したがって、エジプトとの関わりをより具体的に把握することは、当該地域の歴史・文化を描くための重要な課題といえる。一方、エジプトのレヴァント進出に関する考古学的研究は、1980年代以来、大きな進展を示すことなく推移してきた。ところが、最近になり、ベト・シャン (Beth Shean)、テル・アフエック (Tel Aphek) など、いわゆる「エジプト居館 Egyptian Residency」が出土した遺跡の発掘報告書が相次いで出版され、エジプトの活動をより詳細に解明しようとする研究が始まっている。その基礎となるのが、在地で大量に生産されたエジプト式土器 (Egyptian-style

pottery) に関するマーティン (M.R.S. Martin) らの研究成果である。エジプト式土器は器形・製作技法の双方において南レヴァントの土器とは一線を画すものであり、その分布・出土量・器種構成などから、南レヴァントに駐屯していたエジプト人集団の痕跡とみなされるようになった。発表では、このような最新の研究動向を紹介し、日本隊によって調査・研究が進められているテル・ゼロール (Tel Zeror) とテル・レヘシュ (Tel Rekhes) で出土したエジプト式土器の考察を含む、3つの予察を提示した。テル・ゼロールでは、まとまった量の「エジプト式土器」が出土しているが、その大部分は在地の土器製作技法に則って仕上げられたもので、模倣品と捉えることができた。模倣品が生産された背景として、ヨッパ (Jaffa) からアフェックへ至る地域に直接的に進出していた第19王朝の活動がさらに北方に及んでいたという仮説を提示した。また、テル・ダン (Tel Dan) ではレバノン沿岸部で生産されたエジプト式土器が多数出土しており、その様式は第18王朝時代末期から第19王朝時代初頭に属するとされる。このことは、当該時期にレバノン沿岸部にエジプトの拠点があり、内陸に位置するダンとの何らかの交流があったことを示唆する。テル・レヘシュやメギドでは、第20王朝時代に並行する層位から、少数のエジプト式土器が出土しており、第20王朝の拠点都市であったベト・シャンと接触があった可能性について、土器の胎土分析による検証が進められている。

5. 古代メソポタミアにおけるニヌルタ神とマルドゥク神のバラグ祭儀歌——神話・祭儀・政治——

柴田 大輔

古代メソポタミアの神殿祭儀では、エメサルと呼ばれたシュメル語の一種で綴られた祭儀歌・祈祷が少なくとも紀元前一千年紀末期まで歌唱・朗唱されていた。これら祭儀歌・祈祷の大半は、バラグと呼ばれたジャンルに属する。バラグは M.E. Cohen がその著書 *The Canonical Lamentations of Ancient Mesopotamia*, CDL, 1988 において校訂したが、校訂は予備的な水準にあり、多くの重要な粘土板写本が看過されている。この状況に鑑み、発表者はハイデルベルク大学の Stefan M. Maul, エルサレム・ヘブル大学の Uri Gabbay らと全バラグの体系的な校訂に取り組んでいる。この研究計画の一環として、かつて発表者は大英博物館に保管されている未公刊エメサル祈祷粘土板写本のシステムティックな調査に取り組んだが、その過程で特にニヌルタ神とマルドゥク神に捧げられたバラグの新写本を多数発見し、現在、両神のバラグ校訂に取り組んでいる。本発表では、両神のバラグの概要を紹介したうえで、『ルガルエ』などの物語作品とバラグの関係、そして両神のシンクレティズムの問題を、両神の祭祀中心地であるニップルとバビロンにおける神学、祭儀、政治的狀況を踏まえながら、考察したい。

6. サーサーン・ガラスをめぐって

四角 隆二

岡山市立オリエント美術館を含め、世界中の博物館に収蔵されるサーサーン・ガラスのほとんどは、1960～70年代に古物市場を介して蒐集されたものである。サーサーン・ガラスは正式な発掘による資料に限られている上、器形や製作技法など同時代のローマ系ガラスからの影響が強く、不明確なことが多い。

一方、破片資料の蛍光X線分析データの蓄積により、古代西アジアのガラスはアルカリ源の違いによる区別が可能となっている。すなわち、アルカリ源に天然鉱物（炭酸ナトリウム）を用いるローマ系ガラスと、植物灰を用いるサーサーン・ガラスである。ICP-MSによる分析結果によれば、パルティア時代文化層のセレウキア出土ガラスはナトロンガラス組成、サーサーン朝初期に設立されたヴェーアルダシル出土ガラスは、ほとんどが植物灰ガラス組成で、さらに細分が可能だという。このように、理化学分析による研究の進展がある一方、資料の破壊を伴う分析手法は博物館資料に応用されてこなかった。

2004年以降、岡山市立オリエント美術館と東京理科大学中井泉研究室は共同で、オリエント美術館所蔵品の蛍光X線分析を行ってきた。同研究室が現在運用中の分析装置は、非破壊でNa₂OやMgOといった軽元素まで測定が可能となっている。本発表では、これまでの分析結果から、同館所蔵サーサーン・ガラスがMgOとK₂Oを1.5wt%以上含む、植物灰組成であることを示した。

つぎに、パルティアか、サーサーン朝か、その帰属と製作地をめぐり意見が分かれていたイラン北西部ハッサニマハレ7号墓出土突起装飾碗をめぐる議論を整理した。同種同工の岡山所蔵品(102-1143)は植物灰ガラス組成を示すこと、北部／中部メソポタミアにおける類例から、ハッサニマハレ出土ガラスは3世紀中葉以降のサーサーン・ガラスであると結論した。

また、蒐集に関する情報が比較的明確な伝イラン出土資料に、①メソポタミア出土例にはごくまれなローマ系ガラス（例えば紺色斑点文ガラス）が複数含まれ、②碗や鉢など飲用器形が卓越していることを例示し、イラン北西部へは特定の器種が選択的に流入していたことを指摘した。以前から指摘されているハッサニマハレやノールズマハレの葬送慣習が北方民族のそれとの類似することを考慮すると、3～4世紀頃のガラスの流入経路として、コーカサス方面からの流入を想定することができる。

7. ライオンの東漸と獅子像の成立

北 進一

古来、西アジアあるいは中央アジアで“百獣の王”として崇められてきたライオンは、前漢代に中国へ伝わったと思われる。武帝の治世（在位前141～前87）に宮廷の外園に

師子（ライオン）が飼育されたとの記事が残る（『漢書』西域伝）。中国にはライオンが生息しないため、おそらくシルクロードの開通と軌を一にして西方諸国からライオンがもたらされたと考えられる。実際、『漢書』西域伝には、烏弋山離国に「桃拔・師子・犀牛」がいたと記述されている。しかし、漢代以前にも中国では西方の聖獣ライオンの存在を認識していたらしく、戦国時代の文献に「狡狴（サンゲイ）」の名で現われ、外見は虎に似ているが、虎や豹を食べてしまうと説明している。近年、この狡狴（狡甕）や師子はサカ語（ホータン・サカ語）やトカラ語A方言（月氏語）からきた音訳との説も提示されているが、現在の新疆ウイグル自治区ウルムチ郊外のアラコウ（アラ溝）戦国墓（前4世紀～前3世紀）からは獅子文金箔が出土している。ライオンは西域との交渉によって、まずその文様が中国へと伝わった。例えば仙人神獣文鏡（前1世紀、大阪・和泉市久保惣記念美術館蔵）には、羽人や龍とともに有翼の虎を威嚇する獅子が表わされている。

後漢に入ると、諸文献に西方諸国からの使者がライオンを献上した記録が見られる。章帝の章和元年（後87）に月氏国が「扶拔・師子」を献じ、和帝の永元13年（101）にも安息（パルティア）が「師子」を献じた。また、順帝の陽嘉2年（133）に疎勒（カシュガル）王が「師子・封牛」を献じている。建和元年（147）頃の山東省嘉祥県武氏祠石闕の一对の石獣は、西闕に「師子」と銘記され、鬣をつけ翼を表わさない写実的なライオンのかたちを象っている。戦国時代以降、中国の聖獣表現は虎の形を基本とし、翼を表わすものが出現する。これら虎形を基本とした神獣は、墓の参道に石闕とともに一对で置かれ、鎮墓獣を形成したと思われる。武氏祠の獅子像や、同じく鬣をつけ翼のない四川省蘆山県楊君墓の獅子像は、虎豹を喰うという獠猛さから虎形を基本とした鎮墓獣以上にその辟邪の意味が強調され、一对として墓前に置かれたのであろう。あるいは仏教伝来にもない獅子座の影響を受け、ほぼ同形一对で獅子吼する姿で表わされた可能性もある。しかし、このような写実的な獅子像は、すぐに従来通りの虎形鎮墓獣と融合し、翼をもつものや顎鬚を生やす獅子像へと変化していった。

8. サライ・アルバムの中国的絵画における道教的要素

劉晶晶・ヤマンラール水野美奈子

トブカブ宮殿美術館所蔵のサライ・アルバム H.2153 と H.2160 は、白羊朝（1378-1508）の君主ヤアクブ・ベイ（1478-90）の宮廷で編纂されたと考えられている。2冊のアルバムは、合計1399点の書の作品、669点の絵画、87点の切り紙の作品が無秩序に貼られているモラッカア（詩画帳）である。絵画総数のうち中国絵画と中国風絵画がほぼ五分の一を占めることは、この詩画帳が20世紀初頭に世界に公開されて以来、絵画

の東西交流として注目されてきた。しかし先行研究の多くは図像分析や様式研究で、中国絵画のイスラーム世界での受容や中国的絵画要素に関する意味論的解釈は少ない。

本発表の前半では、H.2153のフォリオ98aに貼られているジャアファル・バーイソンゴリー筆の「上申の書」(1420年代後半のバーイソンゴルの宮廷工房の作業状況の記録)に記されているハージェ・ギヤソッディーンが、1419年にシャーロフやバーイソンゴルなどによってヘラートから北京に派遣された使節団に同行したハージェ・ギヤソッディーン・ナッカーシュと同一人物の可能性が高いという視点から、使節団の旅程を再考し、画師ギヤソッディーンが訪問、見学、体験した場所や事象、画家が体験した中国文化や芸術に対する印象の分析を試みた。(劉)

発表の後半では、使節団が明の道教にも接していたこと、当時の明の社会において道教が興隆していたことを論拠として、サライ・アルバムの中国的絵画の中に道教的要素があることを以下の4段階に分類して図解した；1) 道教美術が明白な作品：仙人図(蝦蟇鉄拐、女道士など) 2) 道教的要素と仏教的要素が混在するもの：四睡図、観音図など 3) 道教的要素が明白な作品：老子風人物図、仙人風人物図、聖山、仙境など 4) 道教的要素と民間信仰が融合したもの：福・禄・寿すなわち幸福・豊饒・長生の表象(雲、靈芝、太湖石、竹、篔簹、松、牡丹、萱草、蓮、蝶、雄鶏、亀、鶴、鴛鴦、鷺、龍、鳳凰、麒麟など)

サライ・アルバムは書や絵画の粉本としての機能を有するが、サライ・アルバムに集中的に集められた道教的表象の内、特に4)の福・禄・寿の表象は、後世の伝統的なイスラームの具象絵画(写本の挿絵)や文様絵画の中で継承された。(ヤマンラール水野)

第3会場

1. 中エジプト語における強調構文と名詞述部文の連関について 小山 彰

中エジプト語の強調構文は、名詞的動詞形という形態・統語上の特性、ならびに副詞類の焦点化という情報伝達上の特性によって特徴づけられる構文であり、形態・統語上の特性を反映させたこの構文の統語構造モデルとして、ポロツキーによる副詞述部文モデルと、アレンによる名詞述部文(以下、名詞文)モデルの2つが提案されている。

発表者は先に、日本語構文と対照させる観点からこの2つのモデルの比較検証を行い、その結果として、従来広く受け入れられてきた前者よりも、これまで閑却されてきた後者のほうが妥当性の高い統語構造モデルであると結論づけた(小山彰「中エジプト語強調構文の統語構造：日本語構文との比較対照の観点から」『オリエント』52/2(2009), 1-22)。

先の結論は、この構文が名詞文に分類されることを意味するとともに、名詞文として

の強調構文がより上位の名詞文の体系に組み込まれて他の名詞文と相互に関連している可能性を示唆している。そこで本発表では、名詞文モデルの妥当性を名詞文のレベルで検証することを目的として、否定辞 n...is により否定された 1 項名詞文①と強調構文②が並列して現れる以下の用例に着目し、両者が相互に関連していることの確認を試みた。

センウセレト 3 世のセムナ・ステラ (Berlin 1157), 20

① n sA=i is 「私の息子ではない」

② n ms. t(w)=f is n=i 「彼は私に生まれたのではない」

上記課題を達成するための具体的な方策として、本発表では以下の 2 点に関して検討を行った。

(1) 意味・機能的並行性

否定辞 n...is の機能を「否定のスコープ」と「否定の焦点」の観点から分析することにより、文①と②は文構造のみならず、意味・機能的にも並行関係にあることを確認した。

(2) 構造的連続性

文①と②の中間に位置づけられる 1 項 n...is 否定文の用例を、(1)で検討した否定辞 n...is の機能に基づいて分析することにより、強調構文②は中間的な構文を介して 1 項名詞文①に整合的に接続することを明らかにした。

上記の検討結果から、強調構文は名詞文の体系内部に位置づけられることが可能であり、名詞文のレベルにおいても名詞文モデルの妥当性が検証されたと結論した。

2. アムドゥアト書の機能について

菊地 敬夫

今発表では、アムドゥアト書の機能について、以下の諸点に触れながら考察した。

1) アムドゥアト書の配置について

アムドゥアト書には、壁面へのテキストの配置に関する指示がある。これは、アムドゥアト書の目的が、故王に冥界の知識を授けることのみであるとするならば、とりたてて必要では無かろう。むしろアムドゥアト書を指定した壁面に施すことは、アムドゥアト書が王墓の埋葬室と密接なかかわりのなかで何らかの機能を果たしていると考えられる。

そこで配置の指定に概ね則って施されているトトメス 3 世王墓のアムドゥアト書と埋葬室、埋葬室の柱とトトメス 3 世のミイラ布に記されている太陽神への連袴の三者の位置関係とそれらの葬祭文書の内容について分析した。その結果、これらの配置に関しては、B. リヒター (B. Richter) による先行研究で指摘されているように意図的になされている状況を確認した。

2) アムドゥアト書と祭祀について

トトメス3世王墓のアムドゥアト書（第6時中段、第8場面）と太陽神への連祷（天井碑文）の内容を分析した。その結果、それらは故王による太陽神への祭祀と、その対価としての太陽神から故王への恩恵という文脈で読み解くことができた。この文脈のなかで王墓の埋葬室は、祭祀空間となっていることが了解される。これはアメンヘテプ2世王墓以降、埋葬室の角柱に神殿装飾に由来する故王と神が向き合うモチーフが施されることから推測される。

さらにアムドゥアト書の第1時から第3時の結語、第12時のテキストに含まれる冥界の神々による太陽神への讃歌も、冥界における太陽神への祭祀活動という文脈で読むことができる。そこでの冥界に至る太陽神、冥界から天空へ出る太陽神への祭祀は、ルクソール神殿の供物奉献の間の西壁上段に見られる太陽信仰に関する奥義書の内容と対応を見せる。

さらにアムドゥアト書の第12時に描かれた日輪の姿をした太陽神は、トトメス3世王墓、アメンヘテプ2世王墓、アメンヘテプ3世王墓において、石棺に横たわる故王の足側の壁面に描かれている。これによって、故王は太陽神の誕生をその視野に入れることができる。ここから故王が冥界の神々とともに太陽神へ讃歌を唱え、祭祀を執り行うことが想定されていると解釈した。

以上のように、王墓埋葬室の壁面に描かれたアムドゥアト書は、埋葬室を冥界における祭祀空間とする機能を果たしていたと考えられる。

3. エジプト初期国家形成期の土器製作技術——成形技術を中心に——

馬場 匡浩

古代エジプトでは、前3000年頃に初期国家が誕生したとされる。それ以前の先王朝時代（前5-4千年紀）は、国家形成に向けて社会が胎動する時期である。こうした変化期において新たに出現する遺物の1つに、スサ混粗製土器がある。エジプト南部のナカダ文化期中葉に突如として出現し、それまで地域ごとに異なる胎土で製作されていた粗製の土器を凌駕し、ナカダ文化全体に広がっていく。その画一的な胎土と器形、そして出土量の多さから、専門的大量生産によるものと指摘される。つまり、スサ混粗製土器は国家形成期社会の産物であり、逆に、その製作技術や生産形態の研究を推し進めることで、社会の変容をトレースすることも可能となる。発表者が調査を進めるヒエラコンポリス遺跡では、幸いにもスサ混粗製土器の製作址と考えられる遺構が検出され、この問題について具体的に分析・検討できる資料が得られた。そこで、先王朝時代における粘土採取から焼成に至る製作工程全体の技術の解明を目的に掲げてこれまで研究を行ってきたが、今回の発表では、成形痕跡の詳細観察による成形技法の解明を目指す。

完形の壺形土器34点を観察した結果、基本的成形技法は粘土紐による「輪積み法」であり、2回の作業中断（乾燥）を経て底部・胴下部・胴上部の3パーツに分けて成形していた。そしてパーツごとに、掻き上げやナデによって器面の最終調整まで一気に仕上げていることも判明した。重要な点は、一連の成形技法が全資料に共通してみられ、技法が定型化されていることである。次に、この成果を組み入れた技術連鎖の視点で、スサ混粗製土器と伝統的な精製土器（ブラックトップなど）を比較した。粘土採取から焼成に至る全ての工程で、スサ混粗製は精製とは対照的に、簡便で効率的な生産を指向した技術が用いられていることが鮮明となった。

こうした技術が誕生した理由としては、規格性の高い土器を大量につくるためと考えられる。先王朝時代は、エリート層が確立され、階層化や交易活動が活発化する時期であるが、王朝時代にみられるような再分配システムや宗教的・経済的活動が確立していく中で、土器という容器を大量生産大量消費する社会になっていったのではないか。こうした社会の動きに連動してスサ混粗製土器及びその技術体系は誕生したのであろう。

4. エジプト・ダハシュール北遺跡の地下遺構に対するインターネットを用いた公開方法の検討

吉村 作治・矢澤 健

エジプト・メンフィスネクロポリスに位置するダハシュール北遺跡は、吉村作治を隊長とするこれまでの調査によって、中王国・新王国時代の墓地遺跡であることが分かっている。新王国時代の3基のトゥーム・チャペル以外は明瞭な地上の構造物が残っておらず、大半は地下の遺構によって構成される。地下遺構の多くを占めるシャフト墓は、人が容易に降りていける大きさではない。調査成果を一般の人々にわかりやすく伝えるには、遺跡を訪れ、実物を見てもらう方が効果的である。しかし、ダハシュール北遺跡のように地下遺構で占められ、かつ内部へのアクセスが難しい場合、実見は困難である。そのため、別の形で遺跡の情報を補完していくことが必要と考えられる。その1つの試みとして、インターネットを用いた公開方法の可能性について発表した。

インターネットによる遺跡公開のシステムとして、米 Google Inc. が開発した無料のバーチャル地球儀ソフト「Google Earth」のAPIを利用した。シャフト墓開口部など、地表に見えている遺構の測量データを緯度・経度の座標に変換し、Google Earth 上で表示できるようにした。各遺構の情報に関しては、Google Earth のマップ上で遺構をクリックすると遺構の概要が記述されたウィンドウが表示される。ウィンドウにはリンクが含まれており、写真・図を含む遺構・出土遺物の詳細情報のページが別ウィンドウ（別タブ）で表示されるように設定した。また、遺構の年代、王朝、主軸の方向などの条件で遺構の表示・非表示を切り替える機能を付加し、墓番号からの検索機能や、キーワード

にマッチする遺構のみを表示する機能を付した。このシステムによって、遺構の位置関係や、出土遺物の内容を視覚的にわかりやすい形で表示することが可能になった。

インターネット上にデータベースがあることを利用して、現地における携帯デバイスを利用した情報の表示についても対応した。遺構ごとにQRコードを作成し、スマートフォンのリーダーによってデータベースにアクセスできる仕組みを構築した。QRコードの利用により、ダハシュール北遺跡のような、平坦で地上に建造物の少ない場所で景観を損なってしまう説明表示のための看板等を排除することが可能になる。景観に配慮し、かつ常に最新の情報に更新される遺跡公開方法となることが期待された。

5. 第55号墓（ラモーゼ墓）における列柱前室の改変について——エジプト・アメンヘテプ3世期の大型岩窟墓に関する建築的調査—— 柏木 裕之

第55号墓（ラモーゼ墓）は、ルクソール（テーベ）西岸に、アメンヘテプ3世から同4世期に造営された大型岩窟墓である。岩盤を掘り窪めた「前庭部」を経て、地下の「前室」、奥に伸びた「奥室」、そして最奥の「至聖所」へと導かれる。遺体を納めた埋葬室は、前室左奥隅から始まる下降通路の先に位置している。諸室の中でも前室は、精緻なレリーフや壁画で装飾された列柱空間として有名である。本発表はこの前室における柱列の改変と掘削状況について考察を試みたものである。

ルクソール西岸の岩窟墓を集成したドイツの研究者カンパ（Kampp）は、第55号墓のような、前室に2列以上の柱列をもつ形式をタイプⅧと分類し、14例を挙げている。そのうち11基はアメンヘテプ3世末頃の造営と考えられ、前室には、列柱が左右に3～5本ずつ、奥に2列もしくは3列配されている。唯一の例外が第55号墓で、ここでは柱が奥に4列並ぶ構成を採っている。

その理由を探るため第55号墓前室の実測調査を実施し、細部の観察を進めた。その結果、柱列は当初左右4本ずつ、奥行き3列として作られたが、その後、新たに第4列目の柱列が造り出され、部屋が奥に拡張されたと推定された。またこの第4列の中央に位置する2本の柱を見ると、石材が大きく欠損し掘削当初から岩盤の状態が良好でなかったことが窺われた。前室拡張の理由を名状することは困難であるが、奥室への開口部にあたる中央部の岩盤が不良であったことが、新たな壁面を奥に作り出す要因となった可能性を挙げるができるかもしれない。

すなわち第55号墓の前室は、他の類似例と同様に、当初奥行き3列の柱列として計画されていたと考えられ、アメンヘテプ3世末期頃に作られた大型岩窟墓の前室は、柱列を奥行き2列もしくは3列に配する平面形式を基本としていた可能性が高い。更に奥への面的な拡張が可能であったことから、奥室の掘削作業は、前室の掘削が概ね終了した

時点で開始された可能性が高い点も指摘できよう。後者の様相はアマルナに残された未完成の大型岩窟墓でも認められ、掘削工程の包括的な検討が望まれる。

アメンヘテプ3世末期の大型岩窟墓は、新王国時代における岩窟墓の到達点といてよく、近年、複数の外国調査隊が着手するなど、重要な研究テーマの一つになっている。建築学の視点による大型岩窟墓の計画方法や掘削手順の解明が、これらの研究に有用な情報を提供することが期待される。

6. テーベ岩窟墓第47号墓の発掘調査について 近藤 二郎

これまで2007年12月から、毎年、冬季に4回にわたりテーベ西岸アル=コーカ(al-Khokha)地区において、テーベ西岸岩窟墓第47号(TT.47)の発掘調査を実施してきた。TT.47の被葬者は、新王国第18王朝アメンヘテプ3世治世晩年の高官ウセルハトであり、アメンヘテプ3世からアメンヘテプ4世時代への移行を考える上で極めて重要な岩窟墓であると言える。しかしながら、こうした重要な岩窟墓であるにもかかわらず、20世紀初頭の簡単な調査の後、岩窟墓の正確な平面プランや方位、各部の寸法など不完全な状態のままに残されていた。その後、当該岩窟墓は、厚い堆積砂礫により覆われ、いつしか接近することさえも不可能な状況にあった。

TT.47の正確な情報を取得する目的で新たな発掘調査を計画・実施した。墓の位置は、第1次調査(2007年12月～2008年1月)において確定され、第2次調査(2008年12月～2009年1月)において、入口上部の浮彫装飾の再発見に成功した。この入口上部の浮彫装飾は、TT.47とほぼ同時代のTT.192(ケルエフ墓)と酷似していた。TT.192には、アメンヘテプ4世と彼の母親である王妃ティイが描かれていること、TT.47の装飾中央部には、アメンヘテプ3世の即位名が刻されていることから、TT.47からTT.192への移行が明らかになっている。また、従来、墓中央軸線は南北であると推定されていたが、実際の発掘により、南北ではなく東西を示しており、墓の入口は東に面して正面から朝日を受ける構造を呈していることが確認された。第3次調査(2009年12月～2010年1月)で墓入口両脇柱を含む入口まわりの浮彫装飾全体を明らかにし、第4次調査(2010年12月～2011年1月)において、前室内部を初めて観察することに成功した。しかし、墓の前室内部は、崩落した天井により覆い尽くされ、今後、これらの石灰岩ブロックの除去と内部のクリーニングが必要であることが判明している。

本発表では、過去4回にわたって実施してきた発掘調査によって得られた知見をまとめ今後の修復作業を含む発掘調査の方針について報告する。また、上エジプト、ルクソール地域における考古調査の現状についても報告した。

7. トットアメン王の治世における政治体制と高官について 河合 望

トットアメン王の治世における政治体制や高官の詳細に関しては、これまであまり研究が進んでいない。その大きな理由は、トットアメン王治下の高官の墓や記念物がほとんど知られていなかったことが挙げられる。近年ようやくサッカラの新王国時代の墓地の発掘調査が進展し、ホルエムヘブやマヤといった既知の高官墓の周辺に同時代の主要な高官墓が発見された。またテーベやアクミームなどの上エジプトでもトットアメン王治下の高官墓が新たに発見されている。そこで、これらの新しい考古学的調査の成果と発表者によるエジプトおよび欧米の博物館等での資料調査の成果によって明らかとなったトットアメン王の治世における政治体制と主要な高官について検討した。

まずトットアメン王墓の壁画、同王の治世のプタハ大司祭プタハエムハト・ティの墓のレリーフ、同王の乳母のマヤのレリーフにそれぞれ王とともに12人の高官の姿が描かれていることを指摘し、これらの図像がトットアメン王の治世の政治体制を示していることを指摘した。そして、これらの12人と推定されるトットアメン王の治世の有力な高官の称号、役割、家族関係について検討した。とくに12人の中で宰相よりも前に描かれている人物は摂政および大將軍のホルエムヘブと王の後見人である「神の父」アイであるとみられる。このような図像資料は、文献史料からも明らかなようにトットアメン王の治世がアイとホルエムヘブを中心とした有力貴族による政治体制であったことを示す。トットアメン王の治世は、アクエンアテン王の宗教革命の失敗による反動で信仰復興が推進された時代と考えられているが、これらの高官の多くは、アクエンアテン王の治世において既に影響力のあった高官であったことが判明した。また、これまで軍出身の高官が信仰復興を推進したと考えられてきたが、アクエンアテン王の財務長官のような文人高官も継続して任にあたり、信仰復興を進めていたことを指摘した。地方行政官や神官は、これまで知られている史料を調べた限りでは、上エジプトのアクミーム、コプトス、ティニス、アルマントなどの諸都市の有力な豪族の出身者が任命されたことが明らかとなった。トットアメン王の所謂『復興碑』にあるように、地方有力豪族から神官が任命され、祭祀の主導権はそれらの豪族出身者が握るようになったと考えられる。

第4会場

1. カジュバルダム水没危機遺跡群の踏査成果と今後の課題

関廣 尚世・村治 笙子

本調査は、平成22年度 国際交流基金文化協力助成プログラム（事業名「スーダン共

和国におけるカジュバルダム水没危機遺跡救済と文化遺産の保存活用に関するプロジェクト」により、実施したものである。カジュバル地域は、ハルツーム大学のオスマン（Osman）教授が、現レスター大学講師であるD.エドワーズ（Edwards）とともに同遺跡群を1990・1991・2000・2002年に「マハス・プロジェクト」として踏査し、600件以上の遺跡を確認している。これを受け、これまで同遺跡の重要性と調査による記録保存を訴えてきたが、遺跡群の中から具体的に日本隊が調査記録を行う地域、または遺跡の抽出と、調査方法について検討する必要がある、本調査でこれを実施し、3遺跡を抽出した。

3遺跡とは、第3急湍域内に位置するケドゥルマ遺跡（Kedruma）・サブ遺跡（Sabu）・ナウリ遺跡（Nauri）である。

ケドゥルマ遺跡は、ケルマ期からイスラム期の居住地、神殿、墓域からなり、マハス・プロジェクトでは001～008号遺跡が確認されている。今回、002・003・006号遺跡を中心に踏査を行った。002号遺跡では、上部構造が残存する建物跡が1件確認され、遺跡の南東域では土器窯が確認されている。003号遺跡は、上部にピラミッド構造を持っていたと考えられる埋葬施設、006号遺跡は人頭大の石で円形に区画されるケルマ期の埋葬施設である。

サブ遺跡には、キリスト教期からイスラム期の居住地や墓域、ワデイに沿って2000件近い岩壁画があり、マハス・プロジェクトで001～027号遺跡が確認されている。岩壁画は人物や船、動物が描かれ、先史時代からキリスト教期のものであると考えられている。ナウリ遺跡は、キリスト教期からイスラム教期の居住地、要塞、墓域からなり、二つの巨大な岩山が東西に並ぶという地理的特徴をもつ。西の岩山の周囲にはキリスト教期の居住地と要塞があり（001号遺跡）、東の岩山にエジプトファラオ期の碑文と岩壁画（002号遺跡）がある。

以上が各遺跡の概要であるが、すでにマハス・プロジェクト実施されてから20年が経過し、その間に開発行為で遺跡が破壊されているケースも見受けられた。このため、再度現状を把握し、より詳細な発掘調査や記録が必要であり、またこれらのデータが遺跡の水没後も研究者に活用されるような公開の仕方が望まれる。

2. エジプト西方砂漠ハルガ・オアシス アル・ザヤーン神殿遺跡の調査——神殿装飾からのアプローチ——

田澤 恵子

本大会では、エジプト西方砂漠ハルガ・オアシスのアル・ザヤーン神殿遺跡調査（平成19年－22年度科学研究費補助金基盤研究A（海外学術研究）19254002「考古遺跡調査への情報技術導入実験－エジプト・アルザヤーン神殿遺跡」（研究代表者：亀井宏行）

において、神殿装飾に関してこれまでに得られた成果の報告を行った。

アル・ザヤーン神殿は、エジプト西方砂漠に存在するオアシスの中で最大の規模を持ち、ナイル川流域と南方ヌビアや西方リビアを結ぶ一大交易拠点でもあったハルガ・オアシスに遺存している。同神殿遺跡については、2001年度以降、東京工業大学の亀井宏行教授を中心とした様々な分野の専門家から構成される隊が調査を続けており、これまでに、物理探査や測量とその結果に基づく発掘調査及び遺物整理、保存に向けた周辺環境のデータ収集を含む調査、土壌分析に基づく古環境調査、デジタルアーカイブ製作に向けた神殿の3D計測、遺跡の歴史的背景に係る調査などが行われている。

本大会で報告した同神殿遺跡の神殿装飾についての検証結果は、上記のうち、遺跡の歴史的背景に関する考究の一環として2009年度より本格化された調査に基づくものである。

アル・ザヤーン神殿は、ローマ時代の後140年に皇帝アントニヌス・ピウス治世下で修復・拡張されており、現在は干し煉瓦製の周壁に囲まれた敷地内に、入口の塔門から順にアプローチ、前廊、至聖所（前室及び壁龕室）が南から北へ向かって並んでいる。このうち至聖所門、壁龕室門にはこの神殿が捧げられた神々の姿を中心とする図像と碑文、壁龕室の壁龕本体には碑文のみがそれぞれ刻まれていることが確認できる。本発表では、既に報告がなされているギリシア語碑文については詳述せず、エジプト語（ヒエログリフ）碑文と図像レリーフについてのみ、これまでに明らかにできたことを報告した。

また、同神殿の神殿装飾については、上述通り本格的な調査を開始したばかりであり、更に、今年度（2011年度）はエジプトの国内事情により例年通りの調査を行えなかったこともあって、本報告は予備的・準備的な側面が強いことは否めない。そこで、今後の調査に向けての課題と方向性の整理も併せて行った。

3. 祭礼における高級神官の任命——アメンの神妻（Hm.t-nTr）の場合——

深谷 雅嗣

ラムセス六世の娘であるイシスがアメンの神妻に叙任されたのが谷の祭の挙行中であったことは、テーベ西岸のデル・エル＝バキトで発見されたレリーフ断片の付随碑文に記述されている（LD text III, 101）。しかし、R. レプシウスによって発見されたこの史料は、現在行方不明である。その上、付随碑文の王名が書き換えられた可能性があることから、複数の研究者が異なる王家の系図を提示してきた。特に、K. ゼーレはイシスの名を持つ神妻が第二十王朝に二人存在したと考えた（“Ramesses VI and the Medinet Habu procession of the princes”, *JNES* 19 (1960), 184-204）。

デール・エル＝バキトのレリーフに対し、P Bibliothèque Nationale 237, Carton 1 (KRI VI, 339-40) にはラムセス六世治世第三年のアケト第二月の十八日に祭礼が行われたとあり、imy.t-pr という相続文書とアメン大司祭への言及が含まれる。この日付はオベト祭の前夜祭に当たり、高位の神官が官僚が任命された可能性が高い。アメンの神妻の任命の可能性も含めて解釈を試みたが、デール・エル＝バキトのレリーフを再検証できない状況では、帰着点を見つけることが困難だと認めざるを得ない。

しかし、他のアメンの神妻の叙任にも認められる imy.t-pr 文書と祭礼との関連は、高位の人物の称号授与の在り方を知る上で示唆的である。特に、イアフメスの妻であるイアフメス・ネフェルタリがアメンの神妻に任命されるに当たり、imy.t-pr 文書による契約を行った約二十日後にコイアク祭で叙任されたことは興味深い。アメンの名で権威付けされたテーベの主要な祭礼は、神の承認を伴う任命式として理想的な場を提供したと考えられる。実務的な手続きを行った後、事後承認として祭礼における儀礼的就任が行われた一連のプロセスが当時、標準とされた可能性もある。イシスの例が同様の文脈で解釈できないか可能性を残しつつ、祭礼と高級神官の任命の関係を明らかにしていきたい。

4. プトレマイオス朝初期の(大)将軍たち——その性格をめぐる一考察——

藤井 信之

この発表では、プトレマイオス朝初期のエジプト語史料にみられる将軍たちが実体を伴う存在であったか否かを検討した。近年の研究では、プトレマイオス朝初期の段階から、在地エジプト人が重要なポストに任命されていたことが指摘されている。しかしその中であって、軍事面に関しては、否定的見解が優勢で、史料に確認される将軍号所持者たちは実体を伴うものではなく、形骸化した伝統的な称号列举のなかで将軍とされている過ぎないとされてきた。それは古典文献史料にエジプト語史料で確認されるエジプト人将軍の活躍が記されないこと、またポリュビオスがプトレマイオス4世治下のラフィアの戦い以前にはエジプト人が戦闘に用いられることがなかったと記述していることが大いに影響していると考えられる。しかし古典文献史料は後代史料である。この発表では、同時代のエジプト語史料をもとに、プトレマイオス朝を前1千年紀のエジプト史のコンテクストのなかに位置づけてプトレマイオス朝初期のエジプトの状況を踏まえながら考察した。

まずウァジュ・ウルの主アメン・ラーの司祭にして大將軍とされるパディイイエムヘテブの彫像にある碑文史料を検討して、古典文献史料に記されないエジプト人将軍の軍事遠征の存在を確認した。さらにプトレマイオス2世の大メンデス・ステラの碑文を検

討し、プトレマイオス2世がエジプトの軍事層から徴兵して部隊を編成し、その指揮官もエジプト人を任命していたということを論じた。さらに第三中間期からプトレマイオス朝後期に至るエジプトの多くの司祭号を兼帯する將軍号所持者が地方を治める軍政官として機能していたこと、そしてプトレマイオス朝後期には同様の称号所持形態を示す者たちが実際にストラテegosとされている例が幾つもあることなどから、プトレマイオス朝初期の將軍たちも名ばかりの存在ではなく、プトレマイオス王朝の支配のもとで將軍としての役割を果たしていたであろうことを指摘した。そして王朝と神殿（神官団）の関係が重視されるなか、エジプトの軍事勢力にも注目していかなければならないことを指摘した。

5. インダス式印章の「発明」

小茄子川歩

本発表では、先インダス文明期に帰属するクナール遺跡出土印章の検討を通して、インダス式印章の起源について、「発明」というキーワードを用いることで、論理的に説明することを試みた。技術変化における「発明」とは、「技術的にまったく新しいもので、それによって新しいシステム、社会、経済的实践が可能になる」と定義される。「発明」に必要な3要素とは、(1)「発明」を構成する要素がすでに存在していること、(2) 新しいものに対する必要性、(3)「発明」の立案者である（Kristiansen 2005）。

(1)については、先インダス文明期に認められる情報の記録・伝達システムの発達と印章の製作プロセスにおける技術的先適応について検討した。その結果、先インダス文明期には、特定地域における方形・押捺型の凍石製印章の使用を認めることができ、原インダス文字とされるヘラ記号やグラフィティ、後にインダス式印章の主モチーフとして採用される特定モチーフがすでに存在していることが明らかとなった。さらに実見・実測の結果から、クナール遺跡出土印章に認められる製作痕跡は、インダス式印章のそれと同様な痕跡を示している可能性が高いことも明らかとなった。

(2)については、文明社会の成立に伴い生じたと考えられる新しいものに対する必要性として、社会内部に対する階層あるいは階級性の明示と交易活動の円滑化の必要性、さらに外部社会に対するナショナル・アイデンティティの明示の必要性を検討した。インダス式印章は、先インダス文明期の印章と比較した場合、生産量の著しい拡大とそれに伴うモチーフの多様化・選択性、サイズのカテゴリー化・序列化、製作プロセスの諸段階・各属性の可視性という側面で、新たな秩序化・序列化を志向した戦略と体系に基づいて製作されており、明確にカテゴライズ化することが可能である。これらの諸特徴は、上記の文明社会の成立に伴い生じた新しいものに対する必要性を反映した所産であると考えられる。

(3)については、印章製作には厳格な約束事が存在しているという事実から、製作プロセスの諸段階において規制をかけた者を、「発明」の立案者として想定することができる。

結論としてインダス式印章は、都市社会の成立という劇的な社会変化に対応する目的で、上述の「発明」に必要な3要素を取捨選択し、再構造化することで構想・考案された、すなわち「発明」された器物であると考えられる。

6. ダレル・マジェネイ支脈渓谷現地調査(2010) ——『法顕伝』陀歴仏教寺院とブグッチ遺跡に関連して—— 土谷 遥子

ダレル渓谷のマジェネイ支脈渓谷第二回現地調査の報告である。第一回現地調査の「マジェネイ渓谷」を、より親しまれる「マジェネイ」に改称した。マジェネイ渓谷は2008年度のバキスタン北部地方ダレル渓谷のブグッチ遺跡と、法顕伝の陀歴（ダレル）仏教寺院についての聞き取り調査で、始めてブグッチ遺跡の水源及び避難所として言及された。ダレル調査十年目で初登場したこの渓谷が、ブグッチ遺跡の水源であるとの報告は、1998年のダレル第一回調査以来、ブグッチ遺跡の水源が未発見であったため、重大な情報であった。2009年度のマジェネイ渓谷調査で得た概要は、第52回大会で報告された。

マジェネイ渓谷の全容は2010年度現地調査で把握された。その特色は伏流のため下流部に流れが存在せず、中流部は高台にあるため下流部から望めず、渓谷としての存在感がない。高台の乾いた川床を遡ると干上がった滝があった。聞き取り調査ではブグッチの避難所とされた洞窟が右岸にあり、窟の上方で始めて目にした流れは、その地点で岩石の下に伏流し姿を消し、唯一ダレル川の岸辺のカボッシ村に、泉として表れていた。

流れを遡ると滝があった。2009年度調査では、第一と第二の滝の上流を源流とした。今回の調査では新たに第三の滝、その上流に三つの泉があり、第三の泉がマジェネイ川源流であることが確認された。その奥は針葉樹林タルンであった。第三と第二の泉は、すぐ伏流し、第一の泉のみ伏流せず三つの滝を流れ下っていた。地元では上流から、1)タルン樹林、2)マジェネイ本渓谷（源流より最後の伏流点まで）、3)ガ-（最後の伏流点からダレル川までの乾いた川床）と呼ぶ。

第一、第二の滝の中間右岸に水路の取入口があり、水路はブグッチ遺跡東壁の貯水槽風遺構に達していた。マジェネイ渓谷がブグッチ遺跡の水源であったことが確認された。

聞き取り調査の情報が齎した発見であった。マジェネイ川は湧水の状態で、最も水量のある地点で水路に誘導され、ブグッチ遺跡の彌勒大仏像の巡礼地を支えていたのであろう。マジェネイ渓谷の調査で、課題であったブグッチ遺跡水源問題の端緒が見いださ

れた。地元でもそれほど認められておらず、評価も低くかったが、マジェネイ渓谷はその歴史的価値をひっそりと保ち続けていたのである。聞き取り調査の重さを知る現地調査となった。

7. インド・カティアワール地方における中世の都市構造に関する考察——マングロールを中心に——

岡村 知明

西インドに位置するカティアワール地方は、中世期の南アジアにおけるイスラームとの接触を考える上で重要な地域である。本発表は、2010年9月に実施した現地調査の結果、カティアワール地方の港市マングロールにおいて明らかになった都市形態についての報告と考察である。調査では、マングロール旧市街の詳細な都市測量図（縮尺：1/400）28葉をベースマップとし、都市構造（都市施設の位置、街区構成、街路体系）、および建造物や構造物に関する所在、年代が記されたZ. A. Desai (1999)らによるアラビア語とペルシア語の碑文研究とを勘案し、中世の都市構造への考察を試みる。

現状の旧市街は、東西約420m、南北約450mの矩形の区画で、西南北に市門を持ち、市域中央の城砦、ラヴェリ・マスジッド（1386年創建の碑文）が面する東西のメインバザールが都市軸をなす。南西約2.5キロメートルに位置する港は、旧市街とはバンダル・ロードで連絡され、ムガル朝以前は、メッカ巡礼のための主要な港市として機能していた。バンダル・ロード沿いは現在も数多くのダウ造船所が確認できる。

調査より、現在の旧市街の環状道路のやや内側に市壁の痕跡、市壁外南西の環状道路沿いに内側市壁周囲を囲う外側市壁と想定される市壁と稜堡の痕跡が確認できた。また建築様式や碑文から14世紀後半に遡ると考えられる施設が都市の骨格を決定づける幹線道路に立地する。これらの諸点から、マングロールは南北東西軸を持つ内郭部と、外郭部からなる二重の同心状の方形に基づく構造を持っていたと考えられる。

マングロールの都市形態は、ヒンドゥーの都城理念との密接な関連性が指摘される寺院都市の一つ、マドゥライとの形態的類似が見られ、インド土着の形状を示す。しかしながら、都市の骨格を決定する中世のイスラームの建造物の位置や、インド洋海域の港市として機能してきた背景からも、その都市形態の成立は14世紀後半のムスリム支配以前に遡る。

従来、南アジアにおける矩形都市の系譜は、「アルタシャーストラ」や「シルパ・シャーストラ」といった一連の古代インドの建築書に基づき、従来その理念的モデルが復元されてきたが、インダス文明の崩壊以降、13世紀のムスリム王権成立までの時期は、北インドにおいて都市の形態的展開を迎えることができない。マングロールの都市構造は、以上のようなインド都市史の空白期を補う中世都市の事例として重要である。

8. 中世セファルディームの種なしパン——ハガダーや教訓書に見る伝承とイメージ——

蓼沼理絵子

種なしパンは、ユダヤの最も重要な祝祭の一つであるペサハの象徴的食べ物である。その重要性を、中世セファルディームはどのように伝えていたのだろうか。13～14世紀のアラゴン王国で生まれた教訓書やハガダーから、その様子を探る。

ヘブライ語で「物語」を意味するハガダーは、ペサハの最初の晩餐であるセデルの手順と共に、父から子へと代々語られるユダヤ人の記憶の物語である。出エジプトの話を中心に創世記など、ユダヤの歴史と未来の救済を語る。美しい挿絵や装飾で視覚的にイメージを喚起し、聖書の話以外にも、ペサハ前の徐酔や種なしパン等の食事の準備と分配といった儀式の手順まで描かれているものもある。

サラゴサのラビ・バフヤ・ベン・アシェル (R. Bahya ben Asher/13世紀後半-1340) は、この時代の有名な説教師であり、教訓書『カド・ハ・ケマフ Kad ha-Kemah』を記した。13世紀のスペインでは、周辺のキリスト教社会やドイツ、北フランスのアシュケナジーム文化やミドラシュの復興により説教文学 (*Derashar Literature*) が生まれ、セファルディームの宗教生活に大きな影響を与えた。『カド・ハ・ケマフ』は、カバラの影響を受けた寓意やシンボルを用いた教訓書であり、バフヤの他の著作も含め、ハガダーのテキストや挿絵にもその影響が見られる。バフヤの説教は、知識人層以外の幅広い層も対象としており、ハラハーに見られる法解釈とは別に、当時のユダヤ人の持つペサハや種なしパンに対する伝承と理解を伝える。

また無酵母のパンは、古代オリエント世界から救済のシンボルとしてキリスト教文化と共有されてきた。だが、聖体信仰と反ユダヤ主義的儀式殺人伝説が広まるにつれ、「最後の晩餐」の聖画に見られるようにその描写は変化し、やがてルネサンス期になるとキリスト教美術からユダヤ性は排除されていった。本発表では、ハガダーの種なしパンの挿絵とともに、「最後の晩餐」の聖画における卓上のパンと聖体の描写の変遷を図説した。これらの図像は、キリスト教スペイン社会がユダヤ人とその文化を排斥する以前の中世的な文化的多様性ととともに、ユダヤの種なしパンの伝承とイメージを理解する助けとなるものだろう。

第5会場

1. ウマイヤ朝後期の婚姻政策

横内 吾郎

マルワーン家がカリフ位を世襲したウマイヤ朝後期 (684-750) の歴史研究において、カリフが自らの親族とどのような関係を構築したのか、権力者とその親族の関係という普遍的に観察されるこの問題について、いまだ十分な研究は行われていない。特に、婚

姻を通じて構築された関係についての体系的な研究は皆無と言ってよい。本報告ではウマイヤ朝後期の歴代カリフの妃、カリフの息子の妃、カリフの娘の夫となった人物を可能な限り調べ上げ、その婚姻の傾向の分析を試みた。しかしながら、ウマイヤ朝後期を含む西暦800年以前を研究の対象とする場合、情報源が大きな問題となる。同時代のムスリムの著作物が欠如しているためである。本報告ではムスリム同士の婚姻関係を調査対象としているため、文書類やキリスト教徒史料は利用に向かず、後代（ウマイヤ朝後期から100～200年後）のムスリムの著作物に残された記録の正確性を、まずは吟味せねばならない。

婚姻関係の調査には、具体的には婚姻自体を示す情報と母子関係を示す情報が利用できる。いずれも主に系譜学の書（ズバイリー（d.851）著『クライシュ族の系譜』など）に記録されているが、後者の情報がより体系的に調査できるのに対し、前者はまとまった情報を得るのが難しい。また、誰が母親であるかという情報は、しばしば詩にも記録されている。「某（母の名）の息子」という呼称で個人が特定され、またその母の名も記憶されたのである。こうした情報がどの範囲でどの程度記憶されたのかは、なお検討が必要だが、記録の残存状況からして、カリフやクライシュ族の有力家系の母子関係・婚姻関係については、高い関心とともに記憶され、高い精度で伝承されていると考えてよいだろう。

こうした情報から得られた、ウマイヤ朝後期のカリフ一族の婚姻の傾向において特筆すべきは、ウスマーンの子孫との頻繁な成婚である。ウマイヤ朝が「不当に殺害された」ウスマーンからカリフ位を継承したことが、王朝の正統性の大きな根拠とされたことはつとに指摘されており、成婚によってウスマーン一族との緊密な関係の維持が図られたのだと推測される。一方、クライシュ族以外のアラブの部族との成婚例は少なく、カリフの娘の嫁ぎ先は、ほぼマルワーン家内に限定されている。こうした特徴は、マルワーン家の特殊な立場を窺わせるものであり、同王朝の性格の新たな側面を知る大きな手掛りとなりうるだろう。

2. 「正統カリフ」概念の確立とその意義について

橋爪 烈

「正統カリフ」とは、ムハンマド没後にイスラーム共同体の統治を司ったアブー・バクルからアリーまでの4人のカリフを指す。スンナ派ムスリムにとって理想の治世であるだけでなく、教義の根幹に位置し、同派の集団統合の象徴的概念でもある。報告では同概念の内実について、その形成過程と歴史的意義について考察を行った。

まず、「正統カリフ」概念に関する研究史および史料を提示した。同概念は「イスラーム共同体中の最良の人物は誰か」という議論と密接な関係があり、故に「神学」の分野

で特に議論されてきたことを提示した。特に重要な研究として *Zaman, Religion and Politics under the Early 'Abbasids* を挙げ、同書に「正統カリフ」概念形成におけるイブン・ハンバルの役割の重大性が示されていることから、イブン・ハンバルの思想を足掛かりにして、それ以後「正統カリフ」概念が思想家たちの間でどのように受け継がれていったのかを検討するという方針を立てた。また報告者の専門とするブワイフ朝期において、アッバース朝カリフ、カーディル及びカーイムによる「正統カリフ」概念の採用が見られることから、イブン・ハンバルからカーイムまでの時期を検討範囲とした。

報告では、「正統カリフ」概念の展開を三つの時期に分け、各時期において①イブン・ハンバル、②バルバハーリーとアシュアリー、③バーキッラーニー、イブン・フーラク、イブン・パッタに注目し、彼らの議論中に示された「正統カリフ」概念を考察した。その結果、イブン・ハンバル以降、「正統カリフ」概念はハンバル派ではなく、アシュアリー派知識人によって継承・発展されていく傾向を明らかにした。

また、カーディル、カーイム親子による各種の発布文書に示された「正統カリフ」概念が、上記の知識人たちの議論といかなる形で結びつくのかについても検討したが、「正統カリフ」概念を発展させてきたアシュアリー派知識人たちとカリフとの直接の関係については、繋がりを示す明確な証拠を見出すことができず、この点は今後の課題として残った。

ただ、カーディル親子による「正統カリフ」概念採用の時期とアシュアリー派知識人たちによる「正統カリフ」概念確立の時期がほぼ一致することから、5/11世紀前半こそが、政治・思想両面において「正統カリフ」概念がスンナ派の集団統合の象徴的概念として提示され、いわゆるスンナ派の集団形成がその時期に行われたことを示すことになったと思われる。

3. ザンギー朝ヌール・アッディーンへのヒドゥマ——軍役・移動の記録を中心に——

柳谷あゆみ

ザンギー朝シリア政権所有者ヌール・アッディーン（アレppo支配541-569/1146-1174年、シリア支配549-569/1154-1174年）は28年間に渡る治世においてザンギー朝最大版図を実現した。その戦績により彼の治世は、十字軍としてシリア・パレスティナ地方に侵攻・植民したファランジュに対してもムスリム側の「反撃」を本格化させた転機とも、またエジプトのファーティマ朝を打倒し、アッバース朝カリフを頂点とするスンナ派世界の復興を推進した時期とも評価されるが、その一方で、彼へのヒドゥマ（奉仕）の状態にあり、彼の身内として戦績を支えたアミールやアスカルの概容・動向は十分に検討されてこなかった。本報告では、ヌール・アッディーン治世における軍役及び移動の情

報をまず把握し、それらに名前が挙がったアミール28名について人物別にデータをまとめ、ヌール・アッディーンへのヒドゥマにあった者の動向と政権における役割を以下の通り分析した。

ヌール・アッディーンは急速な勢力拡大によって生じた相対的な兵力不足を援軍によって補っていた。彼自身の信仰心の篤さは、アミールや周辺諸侯から戦費不足の原因と見なされ不評であったが、ザンギー朝モスル政権との協調関係を堅持し、敗戦時補償によって損のない軍役を印象付けるといった実際的対応が総じて順調な軍役へ結びついたと考えられる。

軍役参加の顔ぶれについては、政権内の重要軍役の記録から、彼の乳兄弟マジド・アッディーンと、ザンギー I 世代から仕えるアサド・アッディーンによる二頭体制が改めて確認された。また554年のヌール・アッディーン重態に対するアミールの行動が力関係の確定に影響したことも見てとれた。

ヌール・アッディーンの軍役は、多くは対ファランジュ、対ザンギー朝モスル政権などその正当性が主張されうるものだった。一方、それ以外の「例外的な」軍役実施には①有力アミールの影響②不穏分子の本拠からの隔離の二つの意味を見てとることが出来る。なかでもアサド・アッディーンが主導した三回のエジプト派兵は特異の軍役と言える。第三回派兵の陣容からは叛意をみせた一族を本拠地から引き離す意図も読み取れる。

このようなヌール・アッディーンの政権構造は565年のヒドゥマ拡大と有力アミールの死去により転換期を迎えるが、彼自身の死去によりサラディンを除く新たな有力アミールたちは急速にその影響力を失った。

4. イル＝ハン朝期アルダビール文書にみる東西ユーラシア交流 四日市康博

「アルダビール文書」とはイラン北西部のアルダビールを拠点としたサファヴィー教団に歴代王朝が発給した文書群である。AH704年クトルグ＝シャー発令 *söz* 文書 (MMI, s.442) はワクフ設定地が不法に占有されている状況の改善を命令したもので、方形漢字朱印「右樞密使之印」と方形バクパ字黒印「*Qutuluy Ša-yin belge*」が押印されている。「樞密使」は元朝で軍事を掌る「樞密院」の長官職であり、文書発給者の筆頭アミール職と対応していると考えられる。その裏面はAH704年サアドゥッディーン発令 *söz* 文書 (MMI, s.442) であり、方形漢字朱印「王府之印」が押印される。「王府」は王族の行政府（ディーワーン）であり、サーヒブ＝ディーワーン職に対応する。アルダビール文書にはこの他にも漢字朱印の印影が見られるが、いずれも元朝の官僚体系に準拠しており、元朝から授与された官印であった可能性が高い。

一方、AH721年チョパン発令 *söz* 文書 (MMI, s.449) には方形アラビア字朱印と方形

アラビア字黒印が押印される。同じ印影を持つものにAH726年チョバン発令文書(SAMI, s.250)があるが、そこには方形パクパ字朱印“yi-guo-gong-yin”も押印されている。元朝側の漢語史料(『元史』卷二九, 泰定帝紀)には、イル＝ハン朝アブ＝サイードの使者が臣下チョバンへの授官を請願し、官位、爵位(翊國公)、銀印、金符が授与された記事があり、この朱印が「翊國公印」であることが知られる。文書の発行年(726AH)に、チョバンはホラーサーンに出軍し、ヘラートで元朝の使節から「4ウルスのアミール位」を授与されたが、直後にイル＝ハンの差し向けた兵に討たれている。これは、チョバン家の事実上の独立に対してとられた措置と見られる。

以上のように、アルダビール文書には、漢字・ウイグル字・パクパ字印の使用や元朝官称の仮託の使用など、大ハーンの権威を積極的に利用した形跡が見受けられ、従来考えられていた以上にイル＝ハン朝側がモンゴル帝国＝元朝の権威を自らの王権強化に利用していたことを示している。また、エレゲ家、チョバン家など重臣の家系も元朝の権威を積極的に利用し、後のジャライル朝、チューパーン朝の成立に繋がった。

5. 後期マムルーク朝書記官僚の肖像——ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルを例に—— 大田(塚田)絵里奈

本報告では、マムルーク朝末期において行政官僚の第一人者であったザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒル Zayn al-Dīn Abū Bakr Ibn Muzhir (831～893/1428～1488年)に着目し、当該時期に強い影響力を行使した書記官僚のライフストーリーとその人物像を明らかにすることを試みた。彼はダマスカスにルーツを持つ官僚名家ムズヒル家の出身で、軍務庁長官(ナーズィル・アル＝ジャイシュ Nāẓir al-Jaysh)、秘書長(カーティブ・アッ＝スィッル Kātib al-Sirr)などの要職を歴任した人物であった。

15世紀のマムルーク朝は周辺諸国との抗争による軍事遠征費の増大、国有地の流失、ペストの大流行による人口減などを主因として王室財政は悪化、国力が衰退していく時期であった。このような状況下、ザイン・アッ＝ディーンは26年にわたりカーティブ・アッ＝スィッル職を保持したが、この在任期間は歴代のカーティブ・アッ＝スィッルのなかでも群を抜いて長く、その間に4人ものスルタンが交代しているにもかかわらず行政組織の中心であり続けたことは特筆に値する。

まず、ザイン・アッ＝ディーンの生涯をムズヒル家のルーツから辿り、職歴について概略を述べた後、彼が高位の官職を次々と獲得していく背景にみえる叙任をめぐる抗争について検討した。続いて行政官としての彼の業績とカイロ、三大聖地で展開された彼の名による慈善事業を紹介し、年代記、伝記集史料から得られる同時代の歴史家による様々な評価を検討することで、その人物像を照射した。

彼の生涯を再構成する過程で浮かび上がったいくつかの特色は、すなわち彼が要職を長期間保持し得た要因であったといえる。まずはムズヒル家の潤沢な資産があり、次に彼自身の優れた学識、行政手腕が認められたことが挙げられる。大規模な慈善事業や学術活動を積極的に支援することを通じてウラマーの支持を取り付け、有力家系との姻戚関係を築くことで支持基盤を固め、有力ポストを勝ち取っていった。さらに彼は自身の慈善活動を秘匿しようとしたと伝えられ、残酷な刑罰を行なわないことを誓約するなど、自らがいかにか「敬虔」で「公正」であるかを人民に対して巧みに訴えた。そのような「計算高さ」も、地位の保全を可能ならしめた要因の一つであると考えている。

6. サファヴィー朝の多民族統合と移住政策——クルド系諸部族の東部移住をめぐる——

山口 昭彦

トルコ系遊牧国家として成立したサファヴィー朝（1501-1722）は、アッバース1世（1587-1629）による改革を経て、コーカサス出身のゴラーム（「奴隷」）など多様な民族的出自をもった支配層からなる集権的国家へと変貌を遂げたとされる。事実、このことは、その後のイラン史の展開に大きな刻印を残すこととなった。というのも、サファヴィー朝以後、イラン高原に現れる歴史王朝はかつてのようなトルコ系諸部族が結集する部族連合政権としてではなく、多様なエスニック集団を支配層内部に取り込んだ体制として成立するからである。

ところで、こうしたサファヴィー国家の政治変動の過程で、クルド系諸部族の指導者たちもまた地方統治や中央政界で頭角を現してくることは意外と知られていない。タフマースプ時代（1524-1576）には、世襲の所領に対する支配権を安堵されつつも政権中枢からおおむね疎外されていたクルド系アミールたちが、16世紀末以降、故地たるクルディスタンを遠く離れてイラン各地において重要な知事職を与えられ、なかには大宰相職など枢要ポストを手にするものまで現れるのである。

本報告は、これまであまり知られることのなかったサファヴィー朝によるクルド系諸部族に対する移住政策とその結果としてのかれらの政治的台頭という事象を取り上げ、そのことがサファヴィー朝の体制変動といかなる形で関わっていたのかを論じたものである。はじめに、クルド系諸部族が東部地域へ移住させられたのはタフマースプ時代であったこと、また、かれらが、世襲の所領を有しサファヴィー朝に名目的にしか臣従しない有力クルド系諸部族とは区別されて、王朝に忠実な「イランのクルド」として認識されていたことを指摘した。次いで、アッバース1世登極後、トルコ系諸部族の力が相対的に低下するなかで、これら「イランのクルド」の指導者たちがイラン東部やペルシア湾岸などサファヴィー国家の辺境地域において国防防衛を担わされ、また中央政界に

においても台頭する経緯を具体的に検証した。以上、本報告では、サファヴィー朝200年の歴史を通じて、クルド系であっても政権運営に深く参与するという事実が支配層の間で広く受け入れられていく過程を明らかにすることができた。

7. 近代オスマン帝国における女子教育制度の導入

松尾有里子

本発表では近代オスマン帝国における女子教育の導入と定着の過程を整理するとともに、新たに開校した女子師範学校（Dârülmüallimât）に着目し、その職業教育の実態を検討した。

オスマン帝国では1839年のギュルハネ勅令公布を嚆矢として、一連の近代化改革＝タンズィマート（制度の再編：1839-76）が開始された。1869年に発布された公教育法は、臣民には等しく教育の機会を与える目的から、これまで伝統的イスラム教育機関では学ぶ機会のなかった女子を6歳から4年の修業期間で継続的に学習するよう義務づけた。アブドゥルハミト2世（在位1876-1909）時代には、小学校・中学校の拡充がなされ、イスタンブルはもとより地方にも続々と開校された。なかでも、中等教育においては、男女別の教育プログラムが生まれ、女子にはフランス語や数学が課されないかわりに家政、保健衛生学が課された。一方、イスタンブルでは、政府高官たちにより富裕層の子女向けに小中一貫の女子専門学校を開校され、ここでは手工芸と料理を中心とした実業教育が行われた。女子学校の設立と増加により、女子教育に専従する女性教師の育成が早急に求められるようになった。そして1870年に女子師範学校が、全国の女子小学校・中学校・高等中学校への教師を育成する目的で創設された。これは近代女子教育の基盤となるとともに、教職という専門的知識と技能を備えた女性を養成する機関となった。

タンズィマート期からアブドゥルハミト2世期までの女子教育プログラムを検討すると、ここでは、初等中等教育を通じ読み書き、簡単な算術の修得と家政・保健学に通じたイスラム的道德心の厚い家庭婦人の育成が求められていたことがわかる。従って、男子と異なり高等教育機関へ進学する道があらかじめ閉ざされていた。しかし、女子校におけるこのような実務教育の充実は、その教育に携わる女性教師の養成を目的とした師範学校の設立につながった。そして女性が男性と同等の教育内容を享受できるようになるのは、第二次立憲制期からではあるものの、女子師範学校は女子教育の中核を担うために、さらなる質の向上をめざした女子高等教育機関の開設を求める動機にもなったといえよう。

8. オスマン朝末期のユダヤ教徒——万国イスラエル連合を中心に——

宮武 志郎

19世紀半ば、フランスのユダヤ教徒が中東にいる同胞のユダヤ教徒を救おうという目的で、1860年、パリで万国イスラエル連合（L'Alliance Israélite Universelle）を設立し、オスマン朝領内各地で学校を設立、近代的教育を施した。また、オスマン朝のユダヤ教徒コミュニティも連合を受け入れた結果、新たな新聞発刊に象徴されるように、ユダヤ教徒の間に知的レベルの向上が見られた。そして、多くのユダヤ教徒は連合を支持し、青年トルコ革命後、連合は絶頂期を迎えることになった。

19世紀末ヨーロッパで誕生したシオニズムは、アブデュル＝ハミド2世の治世期にはオスマン朝内に入り込む余地は無かった。しかし、オスマン朝の自治領となっていたブルガリアでは、連合の学校を卒業したユダヤ教徒知識人の間にシオニズムの嵐が吹き荒れた。そして、青年トルコ革命後のオスマン朝内でもシオニズムが勢力を拡大し始め、連合の卒業生の間にシオニストが増大した。これは、まさに連合が行った教育によってユダヤ教徒の知的レベルが大きく向上し、さらに世界の情勢を知ることができるようになった結果である。そしてこれらのシオニストは多くの団体や組織を形成し、オスマン人への同化を目的とし、そしてフランス寄りの連合派の人々に牙をむき始めたのである。

さらに、情勢を複雑にしたのはドイツの中東進出であった。ドイツ外務省の支援を受けたドイツのユダヤ教徒もドイツ＝ユダヤ教徒支援協会（Hilfsverein der Deutschen Juden）を設立し、オスマン朝領内で教育活動を開始した。それも、ヘブライ語を利用した教育を実施したため、シオニストからは好意的に見られた。また、ドイツとフランスの外交的対立は連合と支援協会の敵対関係をもたらし、さらにシオニストと支援協会の接近をもたらした。また、連合の進出によって「正統派」と呼ばれる保守的宗教勢力はかつての勢いを失っていたが、シオニストはこの「正統派」をも連合に敵対する勢力として自陣に取り込むことに成功した。

その結果、オスマン朝のユダヤ教徒コミュニティは完全に連合派と反連合派に分裂し、激しく対立することとなったのである。

第6会場

1. 東方イバード派におけるハワーリジュ派叙述の展開 近藤 洋平

イバード派は、イスラームの分派の一つである。非イバード派のムスリムは、イバード派のおおもとであるハワーリジュ派の活動を否定的に叙述する。そしてイバード派はハワーリジュ派の他分派と一括りにまとめられ、同じく否定的に語られる。

先行研究は、イバード派はハワーリジュ派をどのように語っているかという観点から、

同派によるハワーリジュ派理解を考察した。そして東方イバード派は①アリーのもとから出て行った集団にハワーリジュの語を用い、その集団をイバード派のおおもととして認識していること（本発表ではハワーリジュ(A)と名付けた）、一方②キブラの徒を多神教徒と名付ける諸集団をまとめる語としてハワーリジュの語を用いていることを明らかにした（同ハワーリジュ(a)）。

先行研究を踏まえ、本発表は2つのハワーリジュのうち上述の②の概念を取り上げ、東方イバード派においてこの用法がどのように形成されたか、またハワーリジュ(a)の諸分派はどのように列挙されているかという観点から考察した。考察に際しては、主として東方イバード派に伝わる諸作品を分析の対象とした。

分析の結果、発表者はハワーリジュ(a)の概念について、同概念はアリーのもとを離脱した集団を出自とし、キブラの徒に対して多神崇拜宣告を行うイバード派以外の集団に限定されていること、ハワーリジュ(A)内において生じた逸脱に対処するためにつくられたものであること、そして(i)ハワーリジュ派から現れた過激な主張を提示した個人を列挙する、(ii)ハワーリジュの語に否定的な意味をもたせるという別々に行われた作業に、8世紀半ば以降(iii)自集団を除くハワーリジュ派の諸分派を、多神崇拜宣告の意味を帯びたハワーリジュ(a)の語で括る、という作業を通じて成立したことを明らかにした。また発表者は、ハワーリジュ(a)として列挙される諸分派について、東方イバード派の学者による列挙は10世紀に増加すること、そしてその列挙は、9世紀までの東方イバード派が有する知識を土台としつつ、新たに外部からの情報などを蓄積して、各学者の裁量によって行われた可能性を指摘した。

2. 初期アシュアリー派神学著作における原子論の位置づけに関する再考の試み——

ジュワイニー（イマームル・ハラマイン）の神学著作を中心に—— 倉澤 理

今回の発表におけるねらいは、イスラーム神学における原子論—世界を原子と偶有により構成されていると見做す世界観—が、その秩序の構築者としての神の存在・属性を証明するための、論証手続き上の前提としてだけでなく、神を本格的に言語で記述していく前段階として、原子と偶有の議論がその言語記述のいわば実験的・練習的な役割も担っているのではないかという可能性を指摘することにあった。その具体例として、主要なアシュアリー派神学者、イマームル・ハラマインことアブル・マアラー・アブドゥルマリク・ジュワイニー（d.1085）の神学著作『導きの書』及び『宗教原理の包括』における議論を提示した上で分析し、その仮説の妥当性を検証していくというのが今回の発表の内容であった。

『導きの書』における、神の属性論に先立つ原子論の議論において、ジュワイニーは

原子を「空間を占めるもの」とし、一方で偶有を「原子に存立するマナー」であるとしているが、このマナーとは、付加要素として原子に宿るが、原子の在り方を決定づけ且つその決定どおりの在り方になさしめる偶有の在り方を指し示すものである。

一方、神の属性を論ずるにあたり、ジュワイニーは属性を自体的属性とマナー的属性の2種類に分類しているが、自体的属性の具体例として挙げられているのは、原子の「空間を占める」という在り方であり、マナー的属性の具体例として挙げられるのは、何かを知っているという者が、それによって「知っている者」たらしめられる要因としての「知」の在り方であり、これは上述の偶有の在り方と著しく類似するものであると言える。そしてこのことで明らかとなるのは、2種類の属性のモデルが、原子論の議論において提示されているということである。

以上が今回の発表で検証していった内容である。提起した仮説をより説得性のあるものにするべく、偶有と属性の違いの明確化、属性という概念そのもののより詳細な分析が今後の研究の必須課題となった。

3. イブン・シーナー『動物論』におけるヒト

矢口 直英

中世イスラムを代表する哲学者・医学者イブン・シーナー Ibn Sīnā (d. 1037) の主著『治癒 *K. al-Shifā'*』には動物学を扱う部分がある。『治癒』自然科学部門の最後を飾る『動物論 *fi Ṭabā'ī al-ḥayawān*』(全19巻)はアリストテレスの一連の動物学書、すなわち『動物誌』(全10巻)・『動物部分論』(全4巻)・『動物発生論』(全5巻)を主な情報源とし、それに倣った構成を採っている。イブン・シーナーの動物学はその発生論を中心に研究されており、それ以外は余り注目されていない。今回は医学者としての立場ももつイブン・シーナーの動物学におけるヒト(人間)の位置づけを考察した。

イブン・シーナーの『動物論』に非常に詳細な解剖学的記述が追加されていることは、情報源であるアリストテレスと対比して最も顕著な点である。これらの解剖学は『動物誌』第1巻および『動物部分論』の相当箇所にあるが、Musallam (1998) が指摘したように、これらは『医学典範』から移植されたものであり、『動物論』にはヘレニズム期の医学者によって新しく発見された解剖学的情報が盛り込まれている。そもそも医学は動物のうちでヒトのみを対象とする学問である。したがって、『医学典範』から移植された要素はヒト、「理性ある動物」に関するものにすぎない。また元々ヒト以外の解剖から得られたためにヒトには本来当てはまらない解剖学的情報があり、これらが動物一般の解剖学として、イブン・シーナーの動物学に取り入れられている。アリストテレスはヒトを「われわれ人間にとって動物中で最もよく知られたもの(『動物誌』1.6)」と言って動物研究の際の手がかりに設定しているが、ヒトの解剖学を用いる理由をイブン・

シーナーは特に述べていない。

また、イブン・シーナーはある種の理想的状態を備えたものとしてヒトを捉えている。ヒトの身体の気質 *mizāj* はあらゆる動物のうちで完全な平衡に最も近いとされ、偏りのない基準点と考えられているのである。これらを考えれば、イブン・シーナーの動物学においてヒトは単なる動物種ではなく、また単に最もよく知られた動物でもない、理想的状態の動物として描かれている。医学・生理学的理論に支えられて、その中心に存在しているといえよう。こうした動物論と、彼の靈魂論との関係は、今後の課題としたい。

4. 『親密の灯』冒頭部に見るファナーリーの学問論——「実相学」の主題設定と主題論・原理論の改変——

中西 悠喜

シャムスッディーン・ファナーリー（1431年没）は、タフターザーニー（1389/90年没）に代表される存在一性論批判に対して、存在一性論側から反駁を加えたオスマン朝初期の学者である。ファナーリーは主著『親密の灯』の冒頭部で、アリストテレス『分析論後書』に端を発する「学問」の構造に関する議論を展開している。この種の学問構造論によると、あらゆる学は皆、それ固有の主題・原理・問題を有すとされる。主題とは当該の学における探究がそれをめぐってなされるようなもの、原理とはその学において遂行される探究がそれに基づいて行われるようなもの、そして問題とはその学において実際に探究され、その説明が目指されるようなものを指すという。ファナーリーはこうした既存の学問構造論を存在一性論に対して適用する。目的は「実相学 / 真理探究の学 / 聖法的神学」という1つの学としての存在一性論の確立である。本発表では彼の学問構造論の肝をなすと考えられる「実相学の主題設定」と「主題論・原理論の改変」という2つの問題を取りあげて検討を行った。

ファナーリーはまず実相学の主題を「世界とのつながりにおいて捉えられた神の存在」と設定する。次に彼は自身の実相学構想と調和するように、既存の主題論と原理論に改変をほどこす。具体的にはそれまで学の探究対象から外されていた主題と原理をいずれもその当の学の探究対象とし、主題の実相と存在を当該の学において探究する道をひらく。こうして実相学は神の存在（＝絶対存在）の実在性を人間の能力のおよぶ範囲で探究できる学となる。そしてこの一連の過程を通じてファナーリーが目指していたのが、タフターザーニーに代表される当時の存在一性論批判への回答である。タフターザーニーにとって絶対存在とは単なる抽象概念にすぎない。しかしファナーリーにとってそれは神の存在もしくは神そのものに他ならない。ファナーリーが実相学という学を上述のような仕方でも構想した目的の1つは、こうした存在一性論への批判に答えるために、神の存在としての絶対存在の実在性を——所与の原理と見なすことなく——探究を通じて示

すことにあったと考えられる。

5. ジャーヒズの『書簡集』にみられる奴隷について

波戸 愛美

当報告はアッバース朝期に数々の作品を残した文豪ジャーヒズ(西暦776/7生~868/9没)の著作『書簡集 Rasā'il』(Rasā'il, ed., 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn, 4 vols., Cairo: Maktaba al-Khānī, 1964-79)の所収の二作、「黒人の白人に対する優越性 fakhr al-Sūdānī 'alā al-bayḍānī」と「ジャーリヤとグラームの優れた点について mufākhar al-jawārī wa al-gilmān」に現れる「ジャーリヤ」「グラーム」等奴隷を現す用語について考察した。

まず、「ジャーリヤとグラームの書」でジャーヒズは、グラームの主人(sāhib al-ghulām 同性愛を賛美)とジャーリヤの主人(sāhib al-jāriya 異性愛を賛美)との間の対話形式をとり、両者の優劣を競うという構造を示し、性・恋愛の対象としてのグラームとジャーリヤの比較を示している。ジャーヒズは作中ではこの二者の勝敗はつけられないが、ジャーヒズがグラーム側に好意的な姿勢を示している点に着目する。

以上を踏まえて、「ジャーリヤとグラームの書」では物語の語り手達こそ「男奴隷」「女奴隷」の主人とされるが、実際に議論される問題は恋愛・性愛の相手としての「男性性」「女性性」であり、「ジャーリヤ」と「グラーム」という言葉が元々奴隷のみならず自由人の意味をも含む広い範囲の言葉であるがゆえに、「奴隷」という身分に物語が限定されなかったという結論に至った。

次に「黒人の白人に対する優越性」では、ジャーヒズは特にザンジュを中心とする黒人に対する貶しと称揚を中心に述べている。貶しの部分では、数々の諧謔性の高い詩を列挙する。但し、称揚部分より量的にかなり少ない。対して、貶しの部分が具体性に欠け、黒人に対するおそらく一般的な中傷を皮肉を交えて行っていたのに対し、称揚部分は丁寧な記述を数多く行っている。

つまり、ジャーヒズが両作品で主題としたものは恋愛対象としての男女(自由人を含む)の優劣と、黒人と白人の優劣であった。特に、男同士の恋愛、黒人に対する擁護が両作品の根底に流れていることは否定できない。これら二つの共通点としては、両者共に社会的な地位が低く、マイナーな存在であったことが言える。つまり両作品共に「奴隷」という「身分」にこだわって書いたものではないと結論づけた。

6. トゥーフイーのマスラハ理論とその評価

浜本 一典

近年盛んに唱えられる「シャリーアの目的」論において、ナジュムッディーン・トゥーフイー(657/1259?~716/1316?)の法理論がしばしば取り上げられる。だが、トゥーフイーに対する評価はムスリムの法学者の間でさえ大きく分かれている。

トゥーフイーはイブン・タイミーヤ (d. 723/1328) と同世代のハンバリー派の法学者であるが、同派の伝記集の著者の一人イブン・ラジャブはトゥーフイーがシーア派に転じたと言う。しかしムスタファー・ザイドら現代の研究者によれば、シーア派説は、ハンバリー派のカーディー・ハーリスィーの一派がトゥーフイーを失脚させるために流したものである。イブン・ラジャブはシーア派説の根拠を他にも挙げるが、それらは決定的ではなく、あるいは完全な曲解に基づいている。

だが、トゥーフイーが既存の権威に従順なタイプでなかったのは確かであり、このことはトゥーフイーのマスラハ（福利）理論に最も強く表れている。『ラウダの要約に対する注釈』の中でトゥーフイーは、ハンバリー派の大先輩イブン・クダーマのマスラハ・ムルサラ（明文のない福利）否定説やガザリーの三条件説を否定し、あらゆる行為の是非を福利と害悪の比較考量によって判断することを提唱する。また『ナワウィーの40のハディースに対する注釈』において、儀礼に関する規定や数量規定のように理性によって知り得ないもの、また法定刑のように明文によって特別に害悪が定められているものを除き、明文と福利の保全が矛盾する場合には、福利の保全を優先しなければならないと主張する。

トゥーフイーのマスラハ理論に対しては賛否両論あり、例えばズハイリーは、トゥーフイーの理論をマリークのものと比較した上で、前者は後者と違って人間の理性を啓示よりも上位に置くものであると結論づけ、トゥーフイーを激しく難する。これに対しカラダウィーは、啓示の字義とその背後にある目的をバランス良く踏まえたものとしてトゥーフイーのマスラハ理論を支持する。このような評価の違いは、福利の保全に関してトゥーフイーが設けた例外をどう見るか、またシャリーアの個別的な規定と一般的な原則との関係をどう考えるかという問題と関わっている。

7. 20世紀前半のエジプト社会とスーフィズム——タリーカ系諸団体の活動から——

高橋 圭

本発表では、20世紀前半のエジプトにおけるタリーカの組織や活動の実態解明に向けた予備的作業として、特に1920年代～30年代にいくつかのタリーカが母体となって創設された慈善団体の組織や活動について考察を行った。

一般に、19世紀末以降エジプトのタリーカは世俗化の進展とイスラーム主義の台頭の狭間でその伝統的な社会的機能を喪失して周縁化されていったと考えられているが、この状況の中で、「慈善団体」という新しい組織を通じた社会活動を展開するタリーカが現れていたことが先行研究や同時代史料などから確認することができる。そして、このような慈善団体を組織したいくつかのタリーカに共通する特徴として、まずそれらが19

世紀末から20世紀初頭に誕生した新興タリーカであったこと、しばしばその開祖がスーフィズムの改革を唱えた改革派スーフィーであったこと、そしてこうした新興タリーカが現代においても新しいタイプのタリーカとして活発な社会活動を行っている事実を指摘することができる。

本発表の後半部分では、事例として、アズミーヤ教団の慈善団体であるアズミーヤ同胞団を取り上げ、結成時に作成された団体綱領を参照しながら、その組織構造の分析を行った。アズミーヤ同胞団は1921年にアレクサンドリアで結成された団体であり、その目的は「宗教的慈善活動」とされている。しかし、団体綱領を検討すると、この団体は、教団とは別の「慈善団体」という形を取りながらも、実際にはアズミーヤ教団アレクサンドリア支部の実態部分に当たる組織であったと考えられる。また、組織の内容についてみれば、それはシャイフに権限が集中する中央集権的な体制、組織内での明確な役割分担や階層的構造を持つ官僚的組織構造を備えており、ここに、ギルスナンが提示した1960年代のハーミディーヤ教団の組織を先取りするような近代的な組織性を見ることができる。

慈善団体結成の歴史的背景は、19世紀末以降のタリーカ改革の文脈で理解することができるだろう。すなわち、この動きはタリーカが再び社会との接点を持つために採用した新しい方法であったと解釈することができる。ただしこれは同時に、タリーカが従来の教団組織という形のままであることは近代社会と接点を持つことが困難になっていたという現実を示すものであったとも言えるだろう。

8. 現代スーダンに見るタサウウフとサラフの関係——ルカイニー教団を事例として——

丸山 大介

本発表の目的は、タリーカ・スーフィーヤ・サラフィーヤと称するルカイニー教団を事例に、スーダンにおけるタサウウフとサラフの関係の一端を明らかにすることであった。ルカイニー教団は1918年にムハンマド・アフマド・ルカイニーによって設立された、タリーカ・クルアニーヤ・スンニーヤ・ムハンマディーヤ・ルカイニーヤという正式名称を持つタリーカである。設立後100年に満たない、比較的新しいタリーカのひとつと言える。

同教団は初代シャイフ、ムハンマド・アフマドがアッラーと預言者ムハンマドから直接タリーカ開設の許可を得たことに成立の根拠を持つ。そのため、「アッラーが選んだ教団」を主張すると同時に、他のタリーカとの血統的・道統的接点の不在、他の教団との明確な差異を強調する。

このルカイニー教団の特色として、教団の性格を自ら「回帰の心と刷新の精神を結合

した中庸の方法を取るスーフィー・サラフィー教団」と説いている点が挙げられる。同教団によれば、タサウフとサラフどちらかの極に偏ってはならない。タサウフとサラフの中道を進み、サラフへの回帰とイスラームの刷新を目指すことが重要であるのだ。

本発表は、1) このルカイニー教団においてタサウフとサラフはいかなる意味を持つのか、2) この教団が有するタサウフとサラフの中道を進むという思想がどのような立場であるのかという点に特に着目し、考察を行った。

ルカイニー教団において、タサウフとは完全なムスリムたるスーフィーを養成する、サラフの方法に基づく教導を意味する。預言者ムハンマドを含め、ムスリムの模範たるサラフに基づいた教育としてタサウフが定義されているのである。つまり、タサウフとサラフは相反する概念ではなく、むしろ教育の根拠として密接に関わり合っている。

ルカイニー教団のタサウフとサラフをめぐる主張は、スーフィー・サラフィー両極の間に位置する中道という立場ではない。むしろ、スーフィーとサラフィーを方法論的に混淆させた結果、イスラームの真ん中の、正しい道を進んでいるという立場である。ルカイニー教団におけるタサウフとサラフの関係は互いに相反する極として二元論的に捉えられるのではなく、教育の根拠として相補的な関係にあるのだ。

ポスター発表

1. 北レヴァント土器新石器時代編年の精細化に向けて——テル・エル＝ケルク遺跡 東トレンチの出土土器から—— 小高 敬寛

北レヴァント先史時代の編年観は、長らく1930年代に行なわれたアムーク平原の調査成果に拠ってきた。しかし、1990～92年に実施された筑波大学によるシリア北西部ルージュ盆地の一般調査と試掘調査は、従来の編年観を見直す一つの端緒となり、1993年には同盆地の地域編年が示された。テル・エル＝ケルク遺跡は盆地内に位置する西アジア最大級の新石器時代集落であり、1992年の2号丘における試掘調査を経て、1997年より筑波大学（調査団長：常木晃）とシリア文化財博物館総局（同：J. ハイダール）が合同で発掘調査を実施している。遺跡を構成する遺丘の一つテル・アイン・エル＝ケルク（AK）では新石器時代に狙いを絞った調査が続いており、2005年には東斜面に階段状の「東トレンチ」を設定し、2008年まで4次にわたって発掘した。

結果、第1層から第9層までに至る新石器時代の層序が確認され、8層より上部が土器新石器時代（PN）に相当した。これまでの出土土器の検討から、ルージュ盆地の地域編年について以下のことを指摘できる。

① 出土土器から9層はルージュ1期後葉（LPPNB期）に相当すると思われるが、続く8層に2号丘で得られたようなルージュ2a期（PN初頭）の土器アセンブリッジは

みられなかった。これはAKにおける他の発掘区と同様である。

② 8～7層はルージュ2b期(PN前葉)に帰属し、出土土器には当地最古の土器である「ケルク土器」がみられた。但し、7層ではその数が極めて限られ、一方で8層より粗製土器が多い。8層は本遺跡2号丘の4層やAK北西区2～1層とともに2b期前葉、7層は2号丘3～1層やテル・アレイ遺跡2号丘11～9層とともに2b期後葉、と評価できる。

③ 6～4層はルージュ2c期(PN中葉)に帰属する。数種の土器の有無から、各層ごとに時期を細分できる可能性がある。6～5層はAK中央区Ⅲ期やテル・アレイ遺跡2号丘8～5層に、4層はAK中央区Ⅱ期やテル・アレイ遺跡2号丘4～1層に少なくとも部分的に併行する。テル・アレイ遺跡2号丘4～1層は4～3層と2～1層に細分可能で、かつ後者は同遺跡1号丘25～22層併行でもある。不明な点も残るが、ルージュ2c期は最大で4段階に細分できるかもしれない。

④ 3～1層はルージュ2d期(PN後葉)に帰属し、AK中央区Ⅰ期やテル・アレイ遺跡1号丘21～18層などに併行する。

2. スーダン共和国における彩色壁画について

関廣尚世・村治笙子

本調査は、平成22年度 国際交流基金文化協力助成プログラム(事業名「スーダン共和国におけるカジュバルダム水没危機遺跡救済と文化遺産の保存活用に関するプロジェクト」)により、実施したものである。調査期間中、National Corporation Antiquities and Museums(以下、NCAM)にて文化財、とくに彩色壁画の保存と活用に関する意見交換を行った。また、世界遺産「ゲベル・バルカルとナパタ地域の遺跡群」を訪れ、彩色壁画の現状について調査した。視察成果をもとにNCAMと今後の課題について議論を重ねた。

今回調査対象とした彩色壁画はゲベル・バルカル B300 神殿、エル＝クッル遺跡のタントamani王墓とカルハタ王女墓である。

ゲベル・バルカル B300 神殿は、この地域の聖なる山であるゲベル・バルカルの東側に位置する半独立式の神殿である。タハルカ王による創建で、内部には、同王が大神アメン・ラーを中心とした神々に祭礼をする姿がヒエログリフとともに沈め浮き彫りで描かれている。

前室、副室、至聖所ともに壁または漆喰の崩落、彩色の退色、虫害、蝙蝠糞の付着等が認められ、早急にクリーニングと保存処理が必要な状況にある。また、近年の世界遺産ブームにより、観光客が増加しておりこれに対応した遺跡の整備が必要である。

エル＝クッルはゲベル・バルカルから南東へ15kmに位置する第25王朝の王墓を中心

とした遺跡である。タンタマニ王墓とカルハタ王女墓は、玄室と前室とこれに取りつく階段からなり、壁面には王ないし王女を迎える神々の姿、「ミイラ姿で棺台横たわる王」、「棺台の上でオシリスの姿になった王」が描かれている。

両墓とも NCAM が泥レンガ覆屋を構築しているが、彩色壁画は毎年雨季に水が流入することによるダメージを受けている。また、虫害や増加する見学者によって削り取られるなどの人的被害もある。エル＝クールの壁画もゲベル・バルカル B300 神殿壁画と同様、クリーニングと保存処理、そして水害対策が必要である。

以上 3 件の彩色壁画は、スーダンの世界遺産の中でも中心的存在である。今後、観光や教育活動に活用されるべく、多くの人に公開できるような保存と展示方法が望まれる。

3. エジプト・ギザ、クフ王第 2 の船の船坑の蓋石調査

吉村作治・黒河内宏昌・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・山田綾乃

クフ王の大ピラミッド南脇には、解体された 2 隻の木造船が納められた。東側の船は「クフ王第 1 の船」として復原、展示され、西側の「クフ王第 2 の船」は、埋納時の状態を保ったまま、現在に至っている。早稲田大学古代エジプト調査隊は、木材の劣化が危惧されている第 2 の船を保存、修復し、復原することを目指して 1987 年から調査を続けてきた。本発表は、2011 年 6 月～8 月に実施された船坑上部を覆う蓋石の取り上げ作業に関する報告である。

船坑は、岩盤を幅約 4.8m、長さ約 32.7m、深さ約 1.8m の規模で掘り、更に底部を幅 2.6m の溝状に穿った階段状をなしている。下部の坑には解体された船材が、上部の坑には 41 枚の巨石が蓋石として据えられていた。

蓋石の両脇と船坑との間には封鎖石が 4、5 段程度積み上げられ、更にモルタルや砂で隙間を充填し、密封する工法が用いられていた。多くの封鎖石には線や文字が主に黒色で書き付けられていた。文字は文章の体をなさず、単独の記号として使われていたことから、石材の運搬や設置のための覚え書き、もしくは作業に携わった労働者のチーム名などを表したマーク類の可能性が高いと判断された。

封鎖石を取り除いた後、ガントリー・クレーンを用いて蓋石の取り上げ作業が行われた。蓋石は横幅約 3.8～4.5m、高さ約 1.2～1.8m、厚さ約 0.5～1.0m の石灰岩で、重量は約 7～18t 程度と見積もられた。封鎖石同様、蓋石にも運搬や整形、設置作業に際して記された黒色や赤色の文字類が多数確認された。この中には、「支配者ジェドエフラーの乗組員」と解釈される、王名を伴った労働者チームの名前と考えられる書き付けや、第 1 の船の蓋石では報告されていないクフ王の名を冠した労働者チームの名前も含まれ、両者がどのように作業に関わっていたのかなど、興味深い課題が認識された。

その他、石材の長さ、幅、高さの値を記した赤色の文字も複数の蓋石で認められた。これらの数値は据えられた蓋石の寸法よりも若干大きかったことから、最終的な形状に整える前に書き付けられたと推察される。

封鎖石や蓋石に残された文字類は、古代エジプトの労働者組織を示す第一級の文字資料といってよい。文字や石材、船坑の調査研究を推し進め、蓋石の搬出から運搬、整形、設置に至る一連の工程が解明されることが望まれる。

本調査は(株)ニトリ・ホールディングスおよび外務省草の根文化無償資金協力などの助成により遂行された。ここに記し感謝申し上げます。

4. テル・レヘシュ遺跡第6次発掘調査報告 月本昭男・長谷川修一・小野塚拓造

テル・レヘシュは、現在のイスラエル北部の下ガリラヤと呼ばれる丘陵地に位置する遺跡で、前期青銅器時代IB期から初期ローマ時代にかけての居住が確認されている。本発表では、第6次発掘調査(2010年8月)の主な成果と、出土物の検討作業(2011年8月)によって明確になった点を報告した。

1. 後期青銅器時代に使用された城門

これまでの調査で発掘されていた城門遺構が後期青銅器時代Ⅱ期(前14-13世紀)に使用されていたことが確認された。また、遺構内部から出土した土器片は、鉄器時代初頭まで城門が健在であったことを示す。パレスティナにおいては、後期青銅器時代の町が城門を備えていることは極めて稀であり、当時のテル・レヘシュが有力かつ特殊な町であったことを物語る。

2. ペルシア時代の方形建造物

テル頂上の平坦部で確認されていた1辺50mほどの方形建造物の年代を精査するために、第6次調査では床面を部分的に検出する発掘を行った。取り上げられた土器片を検討した結果、その大部分はペルシア時代の土器であった。引き続き年代を精査する必要があるものの、現時点では、テル・レヘシュがペルシア時代に要塞として機能していたと結論づけられる。

3. 初期ローマ時代の邸宅

ローマ時代の居住地の中心であったと考えられる邸宅が発掘された。邸宅内部は「ウィンドウ・ウォール」と呼ばれる壁によって仕切られ、石敷きの部屋と土間の作業スペースで構成される。床面からは紀元後1世紀に特徴的な土器片のほか、壁面が鮮やかに装飾されていたことを示すフレスコの断片が多数出土した。また後1世紀前半にガリラヤを治めていたヘロデ・アンティパスが鑄造させたコインの出土も特筆される。

5. スーダン図書館所蔵のマカダム・コレクションについて

銭廣 健人

1941年に没したデイヴィーズ (Norman de G. Davies) の遺志を受け継いで、マカダム (M. F. L. Macadam) が「A corpus of inscribed Egyptian funerary cones」(以下 D/M と略記) を著したのは1957年のことだった。「はしがき」に同書の第2巻を準備したいと書かれてあるものの、実際には出版されることはなかった。40年後の1997年にマカダムが死去した後、大箱4箱分に及ぶ彼の手稿類等は一部を除き、家族の手によってスーダン・オープン大学のアブダッラ教授に寄贈された。氏はその後、大学内にある自分の研究室やスーダンの国立図書館であるスーダン図書館、あるいはスーダン大学考古学部などに分割して保管している。しかし同図書館のマカダム・コレクションはどこにも公表されておらず、全く存在を知られていないままだった。

発表者は今年4月から5月にかけて当該図書館を訪問し、自身の研究対象である葬送用コーンにかかわる資料のみを調査・写真撮影した。資料は3種類ある。

① デイヴィーズがコーンについての情報を一種類ずつまとめた手帳が1冊。それを読んだマカダムの加筆修正も随所にある。

② マカダムが作成した、D/Mの第2巻として刊行予定だった4冊の原稿。①の手帳を土台にしている。D/Mに掲載されたコーンは全部で611種類があるが、そのうち211種類分の情報を文章にしている。人名索引・称号索引・略語表・博物館ごとの所蔵情報一覧も添付されている。

③ 出版されたD/M。マカダム自身の手による修正が余白に多く書き残されている。

当該資料の欠点としてはデイヴィーズとマカダムの手書きの文章を解読するのが困難なことや、虫食い部分があることが挙げられる。しかしこれらの資料には新種のコーンのデータをはじめ、出土地の情報・人名の発音に関する考察・豊富な 'Personal communication' ソースの情報があり、資料としての価値は高い。

また今回は入手できなかったものの、アブダッラ氏に渡ったコーン関係資料は少なくともあと1つ、多く見積もってあと5つあることが分かっている。今回撮影した総計958頁からなる6点の資料の写真はすべてオンライン上で公開する予定でいる。

6. 紀元前2千年紀後葉のキプロス土器の独自性と流通——古代オリエント博物館所蔵資料の分析を中心に——

長谷川敦章

古代オリエント博物館は、廣瀬一隆氏から寄贈されたキプロス土器を複数所蔵しており、本発表では3点を取りあげた。いずれも、器面に白色化粧土が塗布された White Slip Ware (WS) であり、水平方向に暢思骨状の把手を一つ有する鉢形土器である本資料は、“Milk Bowl” と呼ばれる。歪な形である WS の成形技法は手握で、轆轤技術が確

立した該期では、WSの独自性の一つである。

WSは文様帯の分類に基づいた編年が構築されている。ここでの3点は、口縁部直下に横位の格子文を有する。これは、Ladder Lattice Groupの最も簡素な文様(LL文)であり、Late Cypriote期(LC)IIA:1-LC IIC:1に比定される。この文様は筆の様な施文具を用い、短く、太さ、幅ともに不均等なストロークの連続で構成される。施文には、回転台の利用ではなく、フリーハンドと思われる。ストロークの形状から始点と終点を確認でき、切合い関係から、施文は把手の左側から始まり、右から左の方向(R-L)であることがわかる。平行する二本のストロークは始点と終点が揃い、2つの施文具を同時に使用した可能性が高い。WSのストロークの方向は、LC期を通してほぼR-Lである。しかしMiddle Cypriote期のWhite Painted Ware(WP)は、ストローク方向がL-Rであり、唯一Karpas半島から出土するWPVがR-Lであると指摘されている。これはWSの出現の背景を考える上で興味深い。

本資料の出土地は“シリア”とだけ伝えられている。WSIIはLC期の東地中海域に広く分布し、北レヴァントでの当該土器の分布は海岸部に集中する。Ras Shamraでは、完形のWSIIはほぼ全て副葬品であり、居住区からは多くが破片資料として出土している。これらを考慮すると、本資料は、Ras Shamra、もしくはMinet el-Beidaの横穴式石室墓出土の可能性がある。

紀元前2千年紀後葉のキプロスは、ヒッタイトやエジプト、ミケーネなどの大国間での争いに翻弄されながらも、常にバランスをとり、独立を守り通した。これは、東地中海域で凡そ400年の間、WSの成形技法、施文方法の独自性が維持されたことから窺い知ることができる。また、本資料の様なWSII normal LLの暢思骨状把手付鉢が、東地中海域に広く流通したことも、強力な政治勢力の存在が確認できないキプロスが、経済や文化の面で独自の立場を築き、周辺地域に対して影響力を有していたことを物語っている。

7. トルコ共和国カイセリ県一般調査(KAYAP)

紺谷亮一・須藤寛史・早川裕弐・山口雄治・

フィクリ・クラックオウル・クトゥル・エムレ

筆者らは2008年より、トルコ・カイセリ県において遺跡踏査を行っている(KAYAP: Kayseri Arkeolojik Yüzey Araştırması Projesi)。カイセリ県では、中央アナトリアにおける中心的都市遺跡、キュルテペ(古代カニシュ)において、1948年以来アンカラ大学の発掘調査が行われている。23,000点以上の粘土板文書から、前2千年紀初頭、アッシリア商人がカニシュを拠点に西アジア全域に及ぶ広範な交易活動を展開したことが明らか

となった。しかしキュルテベ遺跡周辺の考古遺跡の様相は十分把握されていない。当プロジェクトはカイセリ県内の遺跡・史跡のデータベース化、キュルテベ遺跡の発展を主眼とする同遺跡周辺の居住史の把握、そして前2千年紀前半における交易ルートを明らかにすることを目的としている。

2011年まで85件の遺跡、史跡を記録した。踏査にはGPSを携行し、遺跡の正確な地理座標を取得するよう努めた。また一部の遺跡ではDGPS (Differential GPS) と LRF (Laser Range Finder) を組み合わせた手法による高速地形測量を行った。

時期ごとの遺跡数は前期青銅器時代 (EBA) に倍増し、立地条件ではEBA以降、傾斜のなだらかな低地に遺跡が建設される傾向がみられた。EBAに居住パターンの大きな変化があることがうかがわれた。

県南部のエイリキョイ遺跡は交通の要所にあり、遺跡の規模などから、キュルテベ遺跡に匹敵する都市遺跡だったと推定される。GPR (Ground Penetrating Radar) 探査を実施したところ帯状に伸びる強い反応を捉えた。市壁が埋没しているかもしれない。

キュルテベを起点とする遺跡の位置関係をみると、直線距離で30~60kmの間に遺跡が多く分布する。しかし約80km離れたエイリキョイ遺跡も、地形を考慮したコスト距離に変換すれば、遺跡の集中する距離帯にあることが分かった。コスト距離分析を古代交易ルートの推測に活用できるかもしれない。

イキテベ遺跡はエイリキョイ遺跡と同様県南部の交通の要所にある。遺丘を取り囲む人工の石列があり、アッシリア・コロニー時代の都市の周壁とよく似た特徴が認められた。遺跡の立地や規模、周壁の存在から、イキテベはキュルテベのようなカールムをもつ交易都市であった可能性がある。

8. 古代エジプトの神官文字に対する「画像を利用したデータベース」の概要

永井 正勝

発表者は科学研究費補助金の研究代表者 (課題番号22820007) として、古代エジプト新王国時代の神官文字を対象に、字形データベースを作成している。本発表ではその概要について報告した。本データベースは [Work1] Möller データベースの作成と、[Work2] 神官文字画像データベースの作成から成る。

Work1 の作業は [1-1] G. Möller, *Hieratische Paläographie*, 3 vols, Leipzig, 1909-12 のスキャンニング, [1-2] 神官文字番号 (Möller 番号) と聖刻文字番号 (Hierglyphica 番号) の対応表の作成, [1-3] 1-1 と 1-2 を総合した Möller の著作の字形のデータベースの作成, の3つの工程から成る。本作業はすでに終了し、Möller 番号や Hierglyphica 番号で検索すると、該当する字形が一覧される。その際、3巻に分収されている字形を1ペー

ジで閲覧できるようにした。

Work2の作業は [2-1] 神官文字資料を約4000万画素の中判デジタルカメラで撮影する, [2-2] 1つ1つの文字の画像を切り出す, [2-3] 1つ1つの文字にID, 文字コード, 言語情報を付与したファイルを作成, [2-4] 単語レベルでのデータの作成, [2-5] 2-2, 2-3, 2-4のデータを統合した神官文字の画像データベースの作成, という工程から成る。現在, 対象資料のBM10682については, 2-2の切り出し作業を実施しているところであるが, 2-3, 2-4, 2-5の工程は終了している。これにより, 文字や単語に関する情報で検索を行うと, 該当する情報が提示されるようになった。

神官文字資料は, 最近になって全体写真が公開されるようになってきたが, そのような全体写真からは, 文字や単語という言語単位に基づく検索を行うことができない。それに対して発表者が作成しているデータベースは, 言語単位に基づく検索システムと, 言語単位の写真データの提示とを目指したものである。

9. アメンヘテブ3世王墓の埋葬室に描かれた壁画の史料化に向けたデジタル画像化 ——その2——

菊地敬夫・犬井正男・佐藤真知子・吉村作治

1. はじめに

エジプト・ルクソールの王家の谷に位置するアメンヘテブ3世王墓の埋葬室は, おおよそ幅8.2m, 奥行き15.4m, 高さ3.1m (一部4.7m)を測る。その壁にアムドゥアト書が描かれている。発表者は, 多くの研究者が活用できるような環境で公開することを念頭に, ディスプレイ上で壁画を実寸大で表示できるようにデジタル画像化を行っている。

2. 不均一照明の補正

照明モデルを用い, 撮影時の不均一な照明を壁画画像から補正することを試みた。ストロボとアンブレラを用いた照明を仮想的点光源と見なした照明モデルを設定し, 撮影した画像からこのモデルが有効であることを確認した。さらに光源を2灯に拡張したモデルで壁画の撮影画像を補正した結果, 均一な照明を施した画像のようにすることができた。

3. 壁画の色補正

壁画を撮影する際に, 同条件でカラーチャートを写しこみ, チャートの測色値と同じになるように, 撮影画像のRGB値を変換する。壁画画像の各画素のデジタル値 R, G, B を三刺激値 X, Y, Z に変換した。別途撮影したカラーチャート画像から作成した変換行列を用い, 三刺激値 X, Y, Z の色補正を行った。その後, 補正した三刺激値 X, Y, Z をデジタル値 R, G, B に逆変換した。補正画像は, 測色の色再現を行った結果となっており,

測色値である三刺激値 X,Y,Z は壁画そのものに近い値を示す。イエローは赤みが消え、鮮やかになった。また、白も明るくなり、より白くなった。

4. 大画像の作成

各撮影位置において、小画像をパノラマ作成ソフト PTGui によって接合し、中画像を作成する。撮影時にカメラを壁面に完全に正対させることができないため、作成された中画像は壁面に対して平行にはならず、それぞれ傾きをもっている。これらをレーザー点行列を照射して撮影したキャリブレーション用画像を用いて、壁面に対して平行になるように補正し、隣接する中画像間で対応点を求めて接合し、大画像を作成した。

5. 公開時の形態について

アムドゥアト書は、東西南北の壁面ごとに表示する。ディスプレイ上で等倍の画像を拡大縮小、および移動が自由自在にでき、グーグルアースのように観察できるものである。さらに、各壁面のアムドゥアト書の翻字と翻訳を添える。これらはビューア画面とは別個のデータとし、検索機能を備えるものとするのが可能であるか、今後検討していく。

10. ユーフラテス川中流域の先史遺跡——第五次踏査報告——

門脇誠二・久米正吾・下釜和也・西秋良宏

2008年に開始されたシリア・日本共同調査隊によるユーフラテス川中流域の先史遺跡踏査の第5次調査（2011年2月28日～3月16日）の報告である。踏査範囲は、国士舘大学の大沼克彦教授らが発掘している青銅器時代の集落遺跡、テル・ガーンム・アル＝アリの周辺約10kmまでの地域である。本踏査の目的は、1) 青銅器時代までの居住史の確立、2) 青銅器時代における土地利用の調査、そして3) 青銅器時代における当地域の社会集団の考古学的解明である。これまで、前期旧石器から青銅器時代までの遺物や遺構の分布地点を350以上記録した。特に、後期～終末期旧石器時代と青銅器時代の遺跡頻度が高く、今回の踏査ではこの2つの時期に焦点を当て、以下の調査を行った。

1. 青銅器時代の遺跡は3類型（テルなどの長期居住地、石器散布地点などの短期逗留地、墓地）に分けられ、長期居住地と墓地が近接する空間単位が4つ分布することが分かっている。墓地の分布範囲や集落と墓地の年代関係についてさらに明らかにするために、今季の調査では、バイルーン地域のケルン墓の分布範囲精査、ジャズラ墓地周辺の集約的遺物採集、露出遺構断面からの年代測定用試料採取を行った。その結果、バイルーン地域の前期青銅器時代ケルン墓は、同時期のテル・ムグラ・アッザギール遺跡南に近接する墓地群とは空間的に分離することを記録した。そして、中期青銅器時代のC14年代が得られているテル・ジャズラに近接する墓地では、やはり中期青銅器時代の

土器片が採集された。

2. ワディ・ハラールの段丘上でこれまでに発見されていた後期～終末期旧石器時代の遺物集中地点の幾つかにおいて試掘を行い、遺物包含層の検出と年代測定用の試料採集を行った。その内、16R-1と16R-2地点では後期旧石器時代の遺物包含層が検出され、約3.3万年前というC14年代値が得られた。そのほかの地点では、終末期旧石器時代の石器インダストリーの特定に寄与する標本を得ることができた。

以上、1) 前期青銅器時代には河川低地の集落とステップ上の墓地がセットになる一方、中期では両方ともステップ上に設けられるという通時変化を示す証拠を増加できた。ただし、対応する集落の認められないベイルーンの前期青銅器時代ケルン墓の解釈は課題として残る。また、2) ユーフラテス川中流域においてあまり知られていない後期・終末期旧石器時代の居住年代や石器伝統の具体的な分析に値する資料を得ることができた。

11. 王家の谷・西谷、アメンヘテプ3世王墓出土の副葬品について 河合 望

早稲田大学古代エジプト調査隊（隊長：吉村作治早大名誉教授、現場主任：近藤二郎早大教授）は、1989年よりエジプト、ルクソール西岸の王家の谷・西谷に位置する新王国時代第18王朝のアメンヘテプ3世の王墓の調査を実施している。発掘調査は既に終了し、現在はユネスコとの共同の王墓内壁画の保存修復調査、玄室に描かれた『アムドゥアト書』のデジタル記録と研究、出土土器の研究、そして発表者を研究代表者とする副葬品の研究を継続している。

発表者は、2008年度より日本学術振興会科学研究費基盤研究海外学術研究(B)の助成を受け、アメンヘテプ3世王墓出土の副葬品の調査研究を継続してきた。本研究の目的は、早稲田大学古代エジプト調査隊の発掘調査で出土したアメンヘテプ3世王墓の副葬品と1799年のナポレオンのエジプト遠征隊の調査以来、欧米の調査隊によって発見された同王墓の副葬品の調査研究を行い、アメンヘテプ3世の埋葬の一端を明らかにし、古代エジプト新王国時代の王の埋葬の研究に寄与することを目的としている。

本発表では、これまで実施してきた欧米の博物館・美術館およびエジプト現地の遺物収蔵庫における研究の成果を発表した。副葬品のほとんどは破片となってしまうが、ほぼ未盗掘で発見されたトゥトアメン王の副葬品に類似した埋葬セットが明らかとなった。すなわち、石棺、木製で象眼の施された多重棺、木製のカノボス厨子、方解石製のカノボス箱、カノボス壺、多種多様なシャプティ像、木製の神像、小型棺、数々の家具・調度品、装飾品等から構成される。シャプティ像は、特に材質と寸法が多様であり、赤色花崗岩製、閃緑岩性、石灰岩製のものはアメンヘテプ3世葬祭殿出土の

彫像の材質との共通性がみられる。また、アメンヘテプ3世王墓は他の王墓に比べガラス、ファイアンス製品の数が極めて多いことも重要な特徴である。

最後に美術様式と碑文の特徴からアマルナ時代の製作に年代づけられるティイ王妃のシャブティがアメンヘテプ3世王墓で出土していることから、アマルナ放棄後にアメンヘテプ3世王墓にティイ王妃が再埋葬されたことを指摘した。また、王墓玄室手前のI室の入口に記された「治世第3年増水期第3月7日」のグラフィティは、トゥトアンクアメン王の治世のものでティイの再埋葬の日付を記したものである可能性が高いことを指摘した。